2008年度
活動報告書

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

2008年度
活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

はじめに

教養研究センター所長　横山千晶

2008 年度は世界にとっても大学にとっても試練の年となりました。大恐慌以来といわれる経済危機はいまだにその影響は弱まることがありません。この中で、2 層化した日本の雇用形態の実体が浮き彫りになり、私たちは生きていく基盤そのものの脆弱さを身を以て知ることになりました。生活への不安はそのまま自分を支えていたはずの価値観の喪失をも意味します。多くの若者が口にする「私たちの未来は明るいとは思えない」という諦観は決してメディアで騒がれているだけのことではないようです。警視庁の資料によると 2008 年度の自殺者の数は 3 万 2249 人。1998 年以来 11 年連続自殺者の数が 3 万人を上回っているという事実は「希望」という言葉の無力さを物語っているだけではありません。私たちは孤立化し、まわりの人々の置かれた状況に目を向ける余裕や思いやりも失っているのでしょう。

このような経済状況や社会的な不安は、あらためて、若者が集うキャンパスで起こっていることの意味と意義を見直すように大学に促しています。2008 年度は慶應義塾大学教養研究センターにとってもこの問題に真っ向から取り組む年となりました。このような時代に教育の場で必要とされていることは、まさに知を蓄えそれを生きる力につなげ、同時にその力を他者にも及ぼしていくことではないでしょうか。つまり、まず自立し、そして他と協働して生きていく力そのものです。そして知を蓄え、自立するためには十分に五感を働かせる必要があります。

2008 年度はそのような知の確立とネットワーク、そして継承のために組織を改編した 1 年目でもあります。2007 年度は、それまで 5 年間に機能してきた 3 つのセクション「調査･研究」、「交流･連携」、「広報･発信」を改編し、役割ではなく、それぞれの目標を持った事業（プロジェクト）を立ち上げ、メンバーもプロジェクトにかける時間もそれぞれの目標に合わせて自在に編成するという試みを行いました。その成果に基づいて 2008 年度はこの事業制を本格的に推し進める年となりました。もちろんそれぞれのプロジェクトでは今までの 3 つのセクションの役割をその遂行過程で果たすこととなります。つまりプロジェクトに必要な調査や他機関との意見交換を十分に行い、プロジェクトを成し遂げるとともに、広報やその過程の報告、成果の発信までを責任もって各プロジェクトが行うということです。

今までの活動以外に、新たに生まれたプロジェクトは、上に挙げた「生き抜く力」としての自立力、協働力を反映したものです。ここではそれらのプロジェクトのいくつかをご紹介したいと思います。

まず最初にご紹介したいのは、「学生の学びの場を考える（通称：学び場）」プロジェクトです。現在の大学生たちにとって学びの場はキャンパスやクラスだけではありません。クラブ活動やキャンパス近くのカフェ、アルバイト先やボランティア活動、そして携帯電話やインターネットの IT 環境もまた、学生たちに多彩なコミュニケーションと学びの場を与えています。このような現在のさまざまな「学び場」を、ハードとしての学習環境や遠隔授業などのコンテンツ、地域コミュニティや社会との連携などを通してとらえなおし、新たなカリキュラムを構築していくことは、キャンパスをさらに開いた形での知の発展と継承の可能性を示唆してくれます。その中で学んだことを、今度は新たに大学に入ってきた学生たちに継承していくのは、教員や職員だけではないはずです。福澤諭吉が唱えた「半学半教」の精神がここで生きてきます。2008 年度は学生の学びの場を見直すと同時にそのネットワーク化の構築のために、日吉メディアセンター（図書館）と連携して、「学習相談アワー」を試験的に設けてみました。ここでは大学院生が学習相談者として図書館のレファレンス・カウンターに座り、図書館員との 2 人 3 脚で知の世界に踏み込んだばかりの大学生たちにレポートの書き方や文献の探し方、アカデミックなテーマの設定の方法などを手ほどきしました。結果として自分たちの年齢に近い仲間（ピア）の方が学生たちは相談し

やすいという動向も確認できましたし、相談に乗る側も、回答を導き出す過程でより深く広く自らのアカデミックな技術を究めていくことができる手ごたえを感じました。それぞれのケースは相談者の同意のもと、カルテに残し、今後の学習支援の参考にするとともに、2009 年度からは教養研究センターの「アカデミック・スキルズ」を修了した学部生もピア・メンターとして図書館のレファレンス・カウンターに座る予定です。この試みはやがて学生のさまざまな学び場をつなぎつつ、一人ひとりの学生の知と心の支援を行うネットワークの最初の礎石として置かれるものです。

次に挙げられるのは、大学の内と外をつなぐ試みです。学術フロンティア推進事業の「インター・キャンパス構築」プログラムと三田商店街振興組合が協力して 2006 年度に港区にオープンした「三田の家」は、2 年目を迎え大学と地域をつなぐインター・キャンパスとして三田界隈に根を張りつつあります。ここに集まるのは、三田の近辺で活動する多彩な人々です。学生（留学生、日本人学生）、教職員、商店街の人々、そして地域の在勤者たち。これらの人々がこの学び場の教師であり、同時に学生です。出会いの中から新たな学びと街のあり方が見えてくる。この「三田の家」のノウハウを生かして、2008 年 10 月には同じ港区、「三田の家」のすぐ近くに「芝の家」がオープンしました。地域住民の交流促進を目指して作られた「芝の家」は、「三田の家」と緊密につながり、慶應義塾の学生たちが積極的に関わることで、また新しい「学びの場」になっていくといえましょう。

最後にご紹介したい試みは、この知のネットワークを地方に広げていったプロジェクトです。2008 年 3 月に終了した学術フロンティアの理論を試す場として始まった「鶴岡セミナー」（2009 年度より庄内セミナーと改称）は、2008 年度が第 1 回目となります。慶應義塾大学の鶴岡タウンキャンパスは先端生命科学研究所を擁する世界的な研究の発信地ですが、その研究を支えているのが、庄内の土地と文化です。山と海という豊かな自然に囲まれ、ゆっくりと育まれてきた「生命」の在り様は、庄内の文化の中にしっかりと刻まれて人々の価値観を形成しています。この豊かな文化を関東地域で学ぶ学生たちに行動を通して学び取ってもらう体験型の授業が鶴岡セミナーです。初年度にあたる 2008 年は 8 月の 4 日間を利用して、慶應義塾大学からの 12 名の学生が、酒田市にある東北公益文科大学の学部生・大学院生、そして義塾の卒業生と寝食をともにしながら、庄内にどっぷりと浸かりました。そこで感じたことをさらに庄内と日吉を結びながら調査して、11 月には東北公益文科大学のセミナー参加者を日吉に呼んで、最終報告会が開催されました。地元の方々や OB の協力も受け、鶴岡セミナーは、地方のキャンパスに新しい学びの場を形成する試みの第一歩となりました。

2008 年度も教養教育や初年度教育、そして導入教育をめぐる諸研究機関に招かれてこれらの新しい試みを事例報告として紹介したり、その成果をめぐって内外の機関と意見交換を行なったりして、積極的に慶應義塾大学での試みを外に開いていったことも書き添えておきたいと思います。

以上ご紹介したさまざまな試みは、教養研究センターの展開する活動の一端に過ぎません。「生きる力」はこのような時代だからこそ、非常に大きな響きを持っています。しかし、忘れてはならない重要な、かつ最もシンプルなことは「生きること」は「楽しいこと」という気持ちでしょう。自分で考えたことを他人の意見にぶつけ、そこで衝突しながらも解決策を見つけながら前へ進んでいくことはその過程こそが実は楽しいものです。苦しさがなければ楽しさも生まれません。そして楽しさを一度でも経験すると、ともに笑い合う力を少しでも身につけると、人はそれだけ強くなっているはずです。これはそのままこのセンターの各活動の最終目標でもあります。つまり、目標に達するだけではなく、ともにその過程をかかわるメンバーが楽しんでいくこと。その経験こそが、知の継承を大いに高める最大の鍵となっています。是非とも一人でも多くの皆さまに協力を賜り、この楽しさを味わっていただくことができますよう心からお願い申し上げる次第です。

目　次

Ⅰ．はじめに　03

Ⅱ．2008 年度活動報告

1. 教養研究センター運営委員会　06

2. コーディネート・オフィス

1）　組織　09

2）　広報・発信　12

3. プロジェクト

1)※ 研究関連プロジェクト

特定研究　14

基盤研究　17

一般研究　23

公開セミナー　33

2)※ 教育開発関連プロジェクト

極東証券寄附講座運営委員会　34

アカデミック・スキルズ　35

生命の教養学　36

サイエンス・カフェ　37

教員のためのサポート　39

3)※ 交流・連携関連プロジェクト

日吉行事企画委員会（HAPP）　41

日吉キャンパス公開講座運営委員会　42

「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究交流会の開催　44

Ⅲ．資料編

1. 教養研究センター規程　46

2. 教養研究センター運営委員会委員　48

3. 教養研究センターコーディネート・オフィス　49

4. 教養研究センター所員・研究員　50

5. 2008 年度の主な活動記録　52

6. 教養研究センター刊行物抜粋　54

Ⅳ．終わりに　55

※　1）～3）の分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1 つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを 3 つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター運営委員会

運営委員会は例年2回ほど招集され、半年ごとの活動報告と審議がなされている。2008年度は9月29日と翌年3月5日に来往舎シンポジウムスペースで開催された。

第1回運営委員会

西村常任理事の出席を得て、横山所長の議事進行により、各担当委員から2008年度前期の活動について、概ね次の報告がなされた。横山所長は重任（10月から2年間）となった。『2007年度活動報告書』が完成した。「超表象デジタル研究プロジェクト」（前年度終了）の研究成果報告会と2007年度未来先導基金採択事業の「声プロジェクト」報告会を開催した。「教養研究センター選書」の応募は、本年度はなかった。新校舎「学習支援スペース」の検討には、国際センター、外国語教育研究センターと共に当センターも参画している。日吉行事企画委員会（HAPP）の行事企画が報告された。極東証券寄附金を原資とするアカデミック・スキルズ、生命の教養学、その一般公開版サイエンス・カフェの状況報告があった。『誕生と死――生命の教養学Ⅳ』を刊行した。日吉キャンパス公開講座では、秋の講座に加え、参加型少人数セミナーとして春期に3講座を開設した。特定研究では、教育ＧＰなど学術フロンティアの後継事業について検討を進めているとして、新たな言語教育を内容とするプログラム案が説明された。基盤研究の教育カリキュラム研究では実態調査を実施しており、研究会、合宿研究会を開催した。結果を日吉カリキュラム検討委員会に提言する方向である。一方の身体知プロジェクトでは、勉強会を実施しており、また未来先導基金採択事業「声を考える」プロジェクトでは実験授業を行い、音楽、英語のドラマを取り入れた授業も行っている。一般研究では6研究グループに対し、共同研究室の貸与など研究支援をしている。教員サポートでは図書館サービスに関わるメディアリテラシー・ワークショップを開催した。鶴岡セミナーでは夏期の合宿を成功裏に終え、着々と11月の成果報告会の準備を進めている。

続いて審議事項に移り、センター人事について、副所長3名（不破、武藤、種村）の委嘱、コーディネーター4名〔佐藤（元状）、佐藤（望）、萩原、鈴木（晃仁）〕の委嘱、日吉行事企画委員会委員長（小菅）の委嘱、極東証券寄附講座運営委員会委員長（鈴木晃仁）ほか同委員の委嘱、日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長（坂本）の委嘱が承認された。センター規程の改正では、第8条の職位規程に係る表記の改正が承認された。

議題

● 報告事項

1 人事について

2『2007年度活動報告書』について

3 2008年度前期活動報告

● 審議事項

1 人事について

(1) 副所長委嘱

(2) コーディネーター委嘱

(3) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員長委嘱

(4) 極東証券寄附講座運営委員会委員長および委員委嘱

(5) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長委嘱

2 規程の一部改正について

● 配布資料

①『2007年度活動報告書』

②『Newsletter』No.12

③ 2008年度前期活動記録

④「教養研究センター選書」応募要項（2008年度）

⑤日吉行事企画委員会（HAPP）2008年度新入生歓迎行事

⑥ 2008年度極東証券寄附講座時間割表・「生命の教養学」日程表・「サイエンス・カフェ」

⑦ 2008年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座（春学期・秋学期）

⑧特定研究「質の高い大学教育推進プログラム【教育ＧＰ】」案

⑨基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」メンバー表・活動記録

⑩基盤研究「身体知プロジェクト」メンバー表・実験授業

⑪ 2008年度一般研究一覧

⑫教員サポート「メディアリテラシー・ワークショップ／メディアセンター・サービス活用術」

⑬鶴岡セミナー

⑭教養研究センター人事（案）

⑮「慶應義塾大学教養研究センター規程」改正条文新旧対照表（案）

第 2 回運営委員会

西村常任理事の挨拶があり、続いて横山所長の議事進行により、2008 年度後期の活動について、各担当委員から順次報告がなされた。コーディネート・オフィスからは、「内を見つめる・外とつながる」センター活動の様々な具体的取り組みが報告された。基盤研究の教育カリキュラム研究では、セメスター制、副専攻制などを分析、研究してきた。『2007~2008 年度基盤研究報告書・慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②―― 4 年間を見越した教養教育の研究――』がまもなく刊行される。身体知プロジェクトでは、座学によらない実験授業を開設、「体をひらく、心をひらく――ボクってどこにいるの ?」のテーマで 10 月から開始した。特定研究では、学術フロンティアの後継として、外部資金による研究活動の展開を目指しているとされ、「時代を善く生きるための実学の実現―― 21 世紀を先導する頭と体を持つ学生の育成――」、「 身体知 」教育を通して行う「教養言語」力育成の必要性が強調された。一般研究では前期に引き続き、共同研究室を活動に供している。教員サポートでは学生相談室の協力を得て、「学生を知ろう、学生相談室を知ろう」と呼びかけ、1 月にワークショップを 2 回開催し、相談室の活動と連携、発達障害を抱える学生への関わり方を知ってもらった。鶴岡セミナーでは 11 月 15 日に夏の合宿参加者による成果報告会を来往舎で開催した。次回は鶴岡から酒田まで拡大し、「庄内セミナー」として展開したい。極東証券寄附講座では、アカデミック・スキルズ、生命の教養学、サイエンス・カフェを開講した。アカデミック・スキルズではプレゼンテーション・コンペティションを最後に行っている。日吉キャンパス公開講座は「記録・記憶と構想の現場」のテーマで行われ、盛況との分析結果であった。日吉行事企画委員会 (HAPP) からは、秋から実施された 6 本の行事が報告された。

次に審議事項に移った。センター人事では、所員 215 名、兼任研究員 4 名の登録とコーディネーター 16 名、日吉キャンパス公開講座運営委員会委員 12 名の委嘱、特別研究講師 1 名の任用が承認された。2009 年度センター事業計画案について審議され、社会連携プロジェクトでは「芸術と社会」の企画案として、横浜市との連携、日吉キャンパスでの国際会議、寿町でのフィールドワークなどが説明された。コーディネート・オフィスでは、未来先導基金採択事業に「声・身体・感性を考える――高等教育における実践と新しい教育モデルの提示」と「 三田の家 :21 世紀的学生街の創出に向けて」が採択されたので、これを展開する。「 学びの場 」プロジェクトでは日吉メディアセンターと協働し、アカデミック・スキルズの修了生が相談に応じる仕組みを推進する。秋に予定されている教職課程センター教員免許状更新講習ではコンテンツ提供の協力を行うとされた。基盤研究の教育カリキュラム研究では、2009 年度の活動にカリキュラム検討委員会をサポートするための研究資料作成がある。身体知プロジェクトでは引き続き、月例会・実験授業を実施する。特定研究では、語力、創造力、協働力の礎となるべき身体知を、感動体験を通して育成することの意義が説明され、5 グループからなる組織図が示された。一般研究では 2009 年度公募に 7 研究グループの申請があった。教員サポートではメディアセンター、学生相談室の協力によるワークショップを継続したい。庄内セミナーでは、鶴岡から酒田までフィールドを広げ、総合、基調、年度の各テーマにそって、企画を進めたい。極東証券寄附講座では、アカデミック・スキルズは 10 人の講師が Ⅰ と Ⅱ の 3 クラスを担当し、Ⅲ と Ⅳ では 3 名が担当する。「 生命の教養学 」では「『ゆとり』と生命をめぐって」のテーマでオムニバス方式により 7 名の講師で行う。日吉キャンパス公開講座では前回の秋の講座を基に、春期に参加型少人数セミナーとして 5 講座を 4 回ずつ開設する。日吉の塾生は無料とするが、教員アシストを条件とした。日吉行事企画委員会 (HAPP) では新入生歓迎行事として 7 つの企画を予定しているとされ、以上の事業計画はすべて承認された。最後に事務局から、2009 年度センター予算案について、経常費予算は前年度比、若干の増で申請した。未来先導基金、指定寄附金の計上もあるが、今後は学内外の資金獲得に努めたいとされ、承認された。

議題

● 報告事項

1 活動について

● 審議事項

1 センター人事(案)について

(1)所員･兼任研究員の登録

(2)コーディネーターの委嘱

(3)日吉キャンパス公開講座運営委員会委員の委嘱

(4) 特別研究講師の任用

2 2009年度センター事業計画(プロジェクト)(案)について

3 2009年度センター予算(案)について

● 配布資料

① 2008年度後期活動記録

②『Newsletter』No.13

③未来先導基金「声プロジェクト―コレギウム・ムジクム演奏会」

④基盤研究「教育カリキュラム研究」

⑤基盤研究「身体知プロジェクト」

⑥教員サポート

⑦鶴岡セミナー活動報告

⑧ 2008年度極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」「生命の教養学」「サイエンス・カフェ」

⑨ 2008年度日吉キャンパス公開講座

⑩ 2008年度HAPP秋の行事一覧

⑪ 2009年度教養研究センター人事(案)

⑫教養研究センター組織構成と事業計画

⑬ 2009年度未来先導基金採択事業 「声・身体･感性を考える」「三田の家」

⑭特定研究

⑮ 2009年度「一般研究」申請一覧

⑯ 2009年度「庄内セミナー」企画案

⑰ 2009年度極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」「生命の教養学」

⑱ 2009年度日吉キャンパス公開講座(春期)

⑲ 2009年度HAPP春の行事一覧

(松本　実)

組織

慶應義塾大学教養研究センターのコーディネート・オフィスは、教養研究センターの活動全般についての検討を行う機関である。2007 年度の組織改編にともない、規程の改正が行われた。2008 年度初頭の大学評議会でこの改正案が認められると同時に、新しい教養研究センターの組織のもと、正式に活動を開始した。

(1) コーディネート・オフィスの位置づけとメンバーについて

コーディネート･オフィスは、教養研究センター運営委員会の下におかれ、その役割は、活動の企画･運営・支援および統括、研究資金などの導入、内外諸機関との交流・連携の促進、その他センターが主体的に進めるさまざまな事業の母体としての機能を果たすことにある。同時に各委員会との連携を保ちつつ、センター全体の運営のバランスを図る調整機能も併せ持っている。

2008 年度、教養研究センターの各事業は、2006 年度までの 3 つのセクション､｢調査・研究セクション｣､｢交流･連携セクション｣、および｢広報・発信セクション｣を改組し､それぞれの事業(プロジェクト)の中でこれら 3 つの機能をプロジェクトごとに果たせるようにした（2007 年度は試行期間)。つまり、研究および実践の各事業(プロジェクト)は、その中で研究を行い交流･連携を図り、その成果を発信するところまでの役割を担うことになる。各事業はグループごとに遂行され、各グループはメンバーと事業責任者からなる。事業責任者はコーディネーターとしてコーディネート･オフィスのメンバーとなる。なお、各事業には、所長および副所長のうち、1 名以上が関わるものとする。またコーディネート･オフィスは必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託するものとする。現在これらの委員会は、日吉行事企画委員会、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会の 3 つである。

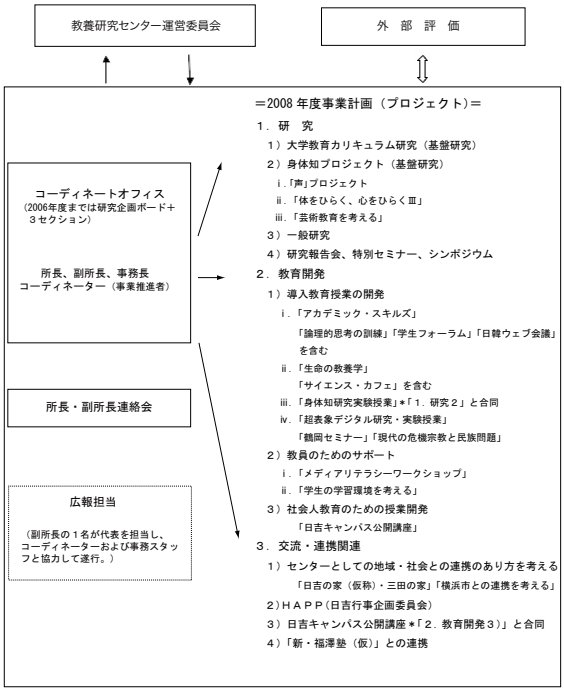
さらに､今回の規程改正により､教養研究センター運営委員会では､必要に応じて特別委員会を設置し、教養研究センターに関わる審議事項の一部について、審議を付託することができるようになった。

なお、教養研究センターの活動は組織とコンテンツを含めて、運営委員会と、内部および外部の評価を受けることとなっている。

コーディネート･オフィスはセンター所長・副所長､センター事務長､各事業責任者としてのコーディネーターおよび所長が必要と認めた者をもって構成される。2008 年 4 月現在はセンター所長、3 名の副所長、センター事務長、各事業の責任者を含む計 17 名で構成されている。

活動の広報･発信･報告は各事業のメンバーによって随時行われるが、センターの活動報告書、シンポジウムなどの報告書､｢ニューズレター｣､｢センター･リポート｣などの編集･発行､センター刊行物の企画･発行、HP の作成と管理を、副所長のうち 1 名が事務組織と協力し合いながら統括する。

大学教養研究センター組織構成(2008 年度)



★　１～３は、プロジェクトの機能分類であり、組織ではない。１プロジェクトが２つ以上の性質を兼ね備えることもある。
★　各プロジェクトには、コーディネーター以外に、所長、副所長のうち１名以上が関わる。
★　「２．教育開発　ⅰ･ⅱ」については、極東証券寄附講座として開講している。

(2) 2008 年度の主な事業

組織図であげられているように、プロジェクトは大きく 1. 研究、2. 教育開発、および 3. 交流・連携関係の機能を持つものに分類されるが、これらの多くのものはその機能がオーバーラップしている。

教養研究センターのさまざまな活動の詳細は、本報告書の各項目で紹介されているのみならず、ホームページ（http://lib-art.hc.keio.ac.jp/）でも随時報告されている。参照されたい。

1) 教養研究センター各事業(プロジェクト)との連携

教養研究センター主催の各行事や事業は、コーディネート・オフィス会議でその内容を話し合い、同時にコーディネーターとプロジェクト・メンバーの連携のもとに開催されている。研究も含め、各事業の活動については、当該セクションの報告を参照されたい。

2) 新入生歓迎行事・極東証券寄附講座・慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座の実施

日吉行事企画委員会（HAPP)、極東証券寄附講座運営委員会、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座運営委員会の各委員会との連携のもとで、一連の新入生歓迎行事および公募企画行事、極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズ」および「生命の教養学」、慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座「記録・記憶と構想の現場」の企画および運営に参画した。

3) 一般研究プロジェクトの選定

一般研究(共同研究)とは、センターの目的に沿った内容の共同研究で、外部資金などを獲得していて既に一定の業績をあげている、あるいは、将来、独創的な成果が期待できるプロジェクトのことである。2008年度は教養研究センターの所員に対して公募され、選定された以下の一般研究プロジェクトが調査・研究を行った（カッコ内は研究代表者と慶應義塾における所属)。各研究の内容については該当項目の報告を参照のこと。

・「Keio NetMath 構築による数理科学の総合的研究」(3年目)(戸瀬信之・経済学部)
・「可積分系の代数解析学」(2年目)(池田薫・経済学部)
・「総合的な視野から見た環境問題解析と環境教育の試み」(3年目)(秋山豊子・法学部)
・「意味フレームに基づく日英バイリンガル語彙データベースの構築」(2年目)(小原京子・理工学部)
・「胚発生三次元教育学術情報データベースの開発」(2年目)(堀田耕司・理工学部)
・「英語読解力強化のためのカリキュラム改革とテスト開発」(初年次)(中村優治・文学部)

4) 実験授業の開講

研究から導き出された理論を実践し、その成果を試す場として実験授業を特定研究や基盤研究「身体知プロジェクト」などの各研究事業と連携しながら開講した。それぞれの内容については該当項目を参照のこと。

5) 国際会議での招待発表

・2008年5月9日(金)成均館大学校(韓国、ソウル市)主催

成均館大学校学部大学創立3周年記念シンポジウム「轉換期の新しい教育需要と大學の融複合教育 —— 韓國大學教育の新たな課題 ——」

横山千晶「学際的科目の複合的教育への寄与——慶應義塾大学教養研究センターの事例をモデルとして」

講演後の質疑応答では理系の学生の初等教育や、慶應におけるリーダーシップ養成カリキュラムに関してなど、数多くの質問が出た。その後の懇親会でも参加者と十分な意見交換ができた。

6) 教養教育関連の招待発表

・2008年5月22日（木）神奈川県内大学図書館相互協力協議会主催

平成20年度総会講演会

横山千晶「学生の『居場所』を考える——学びの場・生活の場としての図書館」

本講演では、現在教養研究センターが取り組んでいる「学びの場を考えるプロジェクト」が提案し推賞している図書館の学びの場・生活の場としての重要性を論じたものである。参加者は神奈川県内の大学図書館に勤務する方々で、それぞれの図書館の例をその後披露してくださり、講演者にとっても大いに勉強となった。今後の「学びの場プロジェクト」に多いに活かせる議論が展開された。

・2008年6月15日(日)慶應義塾大学体育研究所主催

慶應義塾創立150年記念事業　体育研究所新棟完成記念フォーラム

シンポジウム「慶應義塾のスポーツ教育を考える～義塾150年に寄せて～」

横山千晶「教養としての身体知と体育」

本シンポジウムでは教養研究センターが長年取り組んできた身体知教育のあり方を中心に、体育教育の重要性を説き、体育教育がいかにほかの人文知や科学知とつながってより広い知の世界を形成しうるかについて議論したものである。

・2009年1月30日（金）玉川大学コア・FYE教育センター主催

特色GPシンポジウム「学士課程教育と一年次教

育の役割」

場所 : 東京ステーションコンファレンス 605

事例報告　横山千晶「『居場所』としてのキャンパスを作る――初年次の学生に大学は何を提供できるか――」

本シンポジウムはコア・FYE 教育センターを中核として 1 年次教育カリキュラムの全学実施を行っている玉川大学が主催者となって行われたシンポジウムであり、教養研究センター所長の横山千晶が事例報告者をした。本報告では、慶應義塾大学教養研究センターにおける学びの場の構築活動の紹介として、「三田の家」、「芝の家」、「学びの場を考えるプロジェクト」、「鶴岡セミナー」、「声を考えるプロジェクト」、「日吉キャンパス公開講座」の事例を紹介した。その後活発な質疑応答が交わされた。

・2009 年 3 月 13 日（金）早稲田大学　大学史資料センター主催

第 10 回私立大学研究フォーラム

招待講演横山千晶「慶應義塾大学教養研究センターの活動と展開――『異端』と『妄想』から何かが生まれる ?」

慶應義塾大学における教養研究センターの活動の意義、既存の学部に対してセンターはどのような意味を持っているのか、大学教員の使命である研究と教育とをセンター内ではどう両立させてきたのか、センターの今後の課題とは何であるのかといったことを中心に教養研究センター所長横山千晶が講演を行った。当日は日本全国から参加者がおり、学部との関係や学部に所属しながらの所員の活動に関して各大学と意見交換を行ったほか、参加者からアドバイスも賜ることができた。

7）Hiyoshi Research Portfolio 2008 への参加

2008 年 11 月 14 日（金）および 15 日（土）の 2 日間日吉キャンパス来往舎と協生館で開催された、「Hiyoshi Research Portfolio（HRP）2008――『知』をめぐる社会との交流・協働キャンパス――」にポスターパネル展示とシンポジウム開催の形態で参加した。前者のポスターパネル展示では、①基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」、②基盤研究「身体知プロジェクト」、③特定研究　「平成 17 年度文部科学省学術フロンティア推進事業『超表象デジタル研究――リベラルアーツのモデル構築』」④ HAPP、⑤「学びの場を考える」プロジェクト、⑥サイエンス・カフェ――極東証券寄附講座一般公開ゼミ、⑦鶴岡セミナーに関して、計 11 枚のパネルを作成し、主に 2006 年度後半から 2008 年度にかけての活動について発表した。また、ポスターパネル展示のほかに 11 月 15 日（土）に、鶴岡セミナーの最終報告会を日吉キャンパス来往舎で開催した。この報告会では、夏の鶴岡セミナーに参加した慶應義塾大学生、東北公益文科大学生・大学院生、そして卒業生がそれぞれのグループに分かれてセミナー以後の調査に基づいた最終報告を行い、コメンテーターからのコメントを受けて会場と意見交換を行った。

8）コーディネート・オフィス会議の開催

2008 年度は原則として 2 週に 1 回の割合で定例会議を開催した。そのほか、必要に応じて臨時会議やメーリング・リストによるメール会議と意見交換を適宜行った。

（横山千晶）

広報・発信

教養研究センターは、2008年度もさまざまな活動を通して、教養教育の研究を深め、教養教育に関する提言を行ってきた。以下はその成果および活動内容を大学内外に発信した記録である。

1. 教養研究センター・ホームページ

2008年4月より本格的に運用が開始されたホームページは、教養研究センター前副所長の佐藤望氏が掲げた、一目で見てわかりやすい動きのある広報の窓口としての役割を担っている。この当初の目的を2008年10月より後任となった不破有理も基本路線として受け継ぐ形で2008年度のホームページ管理を行った。

教養研究センターが発行する刊行物は一部ホームページで印刷版と並行して公開されている。また広報として発信するのみならず利用者側の便宜に供する試みとしては、たとえば「サイエンス・カフェ」への参加申込書はダウンロードで入手可能となっている。今後、活動の予告から活動内容のアーカイブ化への方向に向けて、「サイエンス・カフェ」シリーズにおいてはチラシのみならず、画像をサムネールで配置しつつ実施内容の紹介を兼ねてデータベース化する、知のデータ蓄積も計画中である。

なお、チラシ・ポスター作成は主に教養研究センター事務局が、ホームページの活動の技術的なサポートと更新作業は慶應義塾大学出版会が行った。

2. Newsletter（ニューズレター）の刊行

教養研究センターは開所以来年2回のニューズレターを刊行しており、2008年度も例年通り7月と1月に発行した(A4版8ページ構成)。第12号(2008年7月10日発行)では教養研究センター発足当時からの課題である教育カリキュラムに関する基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」を特集した。副専攻制、セメスター制、成績評価、外部評価についての論評を掲載した。第13号（2009年1月15日発行）はセンター副所長の交代に伴い、新たな装丁で臨んだ。巻頭言は種村和史センター副所長の「混沌に耐える」、特集は「体験と実学」と題し、武藤浩史センター副所長が執筆。いずれも新しいセンターの理念を謳う記事内容となった。

第12号は広報担当のセンター前副所長佐藤望、第13号は不破有理が担当した。編集・校正作業は教養研究センター事務局、制作は慶應義塾大学出版会があたった。

3. CLA－アーカイブの刊行

CLA-アーカイブズはセンターによる公開活動の中で、とりわけその成果を社会に還元すべき活動記録・講演をアーカイブ化している刊行物である。逐次刊行物としてISSN番号（International Standard Serial Number、国際標準逐次刊行物番号）を取得している。

2008年度の冊子アーカイブ刊行は4冊である。

CLA-アーカイブズ15号は「2008年度公開セミナー講演1：書けない状況を克服するヒントとトリック、講演2：共生？　それとも無知？―― SF文学・科学・技術　宇宙開発技術を一例として」で、ドイツ・ケルン大学のハンス・エッセルボルン教授とヘルガ・エッセルボルン＝クルムビーゲル博士の講義を収録し、45頁の冊子となった。教養研究センターのホームページの「刊行物」欄で15号まで公開されている（随時以下のアーカイブも公開予定)。

CLA-アーカイブズ16号は2008年度基盤研究の身体知プロジェクト「体をひらく、心をひらく――ボクってどこにいるの？」と題する実験授業の報告をまとめている。

CLA-アーカイブズ17号は2007年度から2008年度までの基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究講演記録集」で、表題が示すように2カ年に及ぶカリキュラム研究の一環として行われた多様な講師の講演をまとめたもので、カリキュラム改革の資料集として130頁にもおよぶ大部な刊行物となった。

CLA-アーカイブズ18号は教員サポート企画第5弾「学生相談室の活動と連携」で、さまざまな問題を抱える学生に教員はどのように対したらよいのかを示唆する内容となった。

4. 2007年度報告書の刊行

2007年度の活動報告書は2008年7月31日付で発行された。A4版68頁でセンターの1年間の活動を網羅的に掲載し、またセンターの運営体制、所員・研究員の名簿、活動カレンダーを含め、センターの全般の動きがわかる構成となっている。執筆は各活動を担当した方々に前広報担当の佐藤望センター前副所長が依頼した。

5. その他の刊行物

(1) 基盤研究報告書

「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究②―― 4年間を見越した教養教育の研究」と題し、教育カリキュラム研究シリーズの第2弾として、研究成果をまとめた。170頁におよぶ集大成が2009年3月31日付けで発行された。

(2) シンポジウム刊行物

「外部評価」がシンポジウム刊行物として別途85頁にまとめられ発行された。「慶應義塾大学教養研究センター外部評価活動報告会『みいだす・つなげる・ひろげる』――教養研究センターの過去・現在・未来――」は2008年3月8日に開催された活動報告会において、教養研究センターの開所5年を過ぎた段階でのセンターの在り方を振り返り、今後につなげる企画。冊子は2008年10月31日付けで発行された。

「超表象デジタル研究――表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモデル構築――研究成果報告会」が2008年10月30日付けで刊行された。2008年4月26日に開催された研究成果報告会において「未来の教養教育」「教養教育について考える」と題した二つのセッションで、学内外のパネリストによる報告が行われたが、その内容を冊子として刊行したもの。

上記（1)、(2）はともに教養研究センターホームページの「刊行物」欄で公開されている。

(3) 鶴岡セミナー報告書

山形県鶴岡・庄内の歴史の中で育まれてきた「生命」の在り様を学ぶセミナーが2008年8月31日～9月3日に、鶴岡タウンキャンパスを中心に開催された。このセミナーには塾生だけではなく、地元・東北公益文科大学の学生も参加し、多彩な講師による講義と、即身仏を安置した寺院などを巡るフィールドワークが行われた。また2008年11月15日に最終報告会には来賓の方々そして一般の方を含めて70名を超える参加者があった。参加学生の研究発表、コメンテーターからの論評、活発な質疑を通し、より深い考察の場となった。鶴岡セミナーの内容は教養研究センターのホームページからもリンクによって詳細内容を閲覧可能である。報告書は2009年2月10日付け発行。なお、このセミナーは2009年度も開催予定である。

(4) 「慶應義塾未来先導基金による2007年度文学実験授業の成果と可能性――身体知と新しい文学教育」報告書

慶應義塾創立150年記念事業による未来先導基金採択プログラムである「『声』を考える 一貫教育から高等教育における実践と新しい教育モデルの提示」より派生した成果報告書が2009年3月31日付けで発行された。

6. センター選書の刊行について

2008年度は残念ながら応募がなかったため、2007年度に続き選書の刊行はなかった。今後、募集を早めに広報するなどの工夫をしつつ、選書の在り方について話し合うこととなった。

（不破有理）

特定研究

全体総括

「身体知教育を通して行う教養言語力育成」

当センターの大型研究である文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクトが2007年度に終了したことを受けて、2008年度は特定研究の新たなテーマを決定した。

2008年10月に、新たな特定研究のためのワーキンググループを設置し、議論・検討を行った結果、当センターでこれまでに教育実績のある身体知教育(「体をひらく、心をひらく」)、言語教育(「アカデミック・スキルズ」ライティング指導)、身体知的言語教育(未来先導基金「声プロジェクト」の芸術系実験授業)を有機的に組み合わせて、外国語に特化しないタイプの中上級「語力」(=教養言語力)教育を進めるプロジェクトを、当センターの次期特定研究とすることが決定され、コーディネートオフィス会議で諒承された。中上級「語力」の内容を「学術言語力」、「メディア言語力」、「芸術言語力」の3つに分け、体験・参加型の教育を行い、さまざまな気づきを促す身体知教育の方法を用いて高いレベルの言語教育を目指すという、これまでの当センターの活動実績を礎としながら、それをさらに大胆に展開する先進的な試みとなる(図1を参照のこと)。

教養言語力の3要素

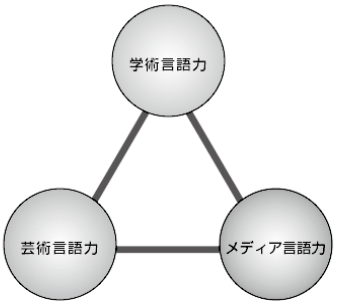


図1

このプロジェクトはまた、本大学学則第1条に「本大学は……広く社会の先導者を育成する」とある慶應義塾大学創業の精神に則り、リーダーシップ教育を合わせて行うものでもある。そのために、創造力と協働力、自己システム知と社会システム知をバランスよく発達させながら言語教育を行ってゆくという側面を持つ(図2を参照のこと)。

体験型リーダーシップ教育を通して
教養言語力の3要素を育む

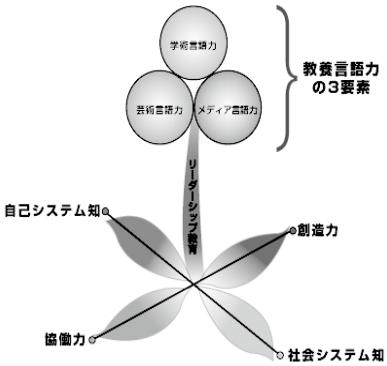


図2

体験のタイプを、「アート」(SECTION I)、「フィールドアクティヴィティ」(SECTION II)、「コミュニティ」(SECTION III)、「コミュニケーション」(SECTION IV)の4つに分類して、それぞれに1つずつセクションを設けて、「学術言語力」、「メディア言語力」、「芸術言語力」のバランスのよい育成を行い、さらに「発信・評価・システムデザイン」を担当するセクション(SECTION V)を作って、計5つのセクションとするところまでは大枠が決められた(図3を参照のこと)。

各セクションの役割と連携

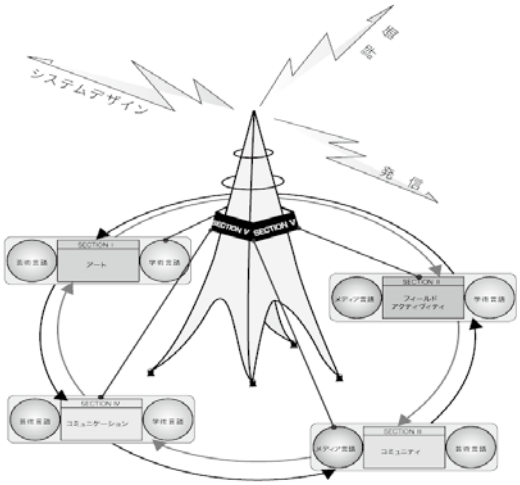


図3

2009年度以降は、さらに議論および活動を進めて、本特定研究を本格的に展開していく予定である。

(武藤浩史)

鶴岡セミナー

鶴岡セミナーは、2008年7月30日のプレ企画を皮切りに、8月31日から9月3日に山形県鶴岡市にある慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を中心として実施された合宿セミナーをメイン企画として、11月15日に慶應義塾大学日吉キャンパスで行われた成果報告会にいたるまで、ほぼ半年にわたって行われました。

セミナーの目的は以下の三点にありました。すなわち、①鶴岡・庄内という日常とは異なる環境の中に身を置き、未知のものに出会うことで学びの場を広げる。②さまざまな世代・地域にまたがる人々と接することで、普段経験することのできない活発な「知」の世代間交流の場を作り出す。③セミナーで使用される教材ならびにセミナーで生まれる成果を広く発信する。

メイン企画の合宿セミナーでは総合テーマ『鶴岡に学ぶ「生命（いのち）」――心と体と頭と――』のもと、「知る・見る・表現する――行動の教養学入門」を基調テーマ、「生命の源――死を想い、生きることを考える」を年度テーマとして羽黒修験と即身仏を取り上げました。参加した慶應の学生たちは、東北公益文科大学の学生と混じっての講義とフィールドアクティヴィティによる心と体と頭をフルに使った学びの体験から大いに刺激を受けたようです。特に東北芸術工科大学教授・内藤正敏氏の教室・宿舎・現場での精力的なご講義は参加者にとって強烈なインパクトを与えてくださいました。また、慶應と公益大の学生が共同で行ったプレゼン（合宿最終日の中間プレゼン、11月15日の成果報告会でのプレゼン）や成果報告書作成にあたっては、学生たちは時間的な制約や空間的な隔たりを乗り越えて頑張ってくれました。それは成果報告会でのプレゼンテーションや成果報告書の質の高さからも窺い知ることができると思います。

セミナー実施にあたっては鶴岡市長・富塚陽一氏、致道博物館館長・酒井忠久氏をはじめ、東北公益文科大学の先生方や鶴岡三田会、酒田三田会など鶴岡・庄内のさまざまな方々のご理解・ご協力をいただきました。INAXライブミュージアム「土・どろんこ館」の全面的なご協力で実現した特別プログラム「土の土方と水滴の時間」（舞踏家・土方巽の土人形にセミナー期間中、水滴を垂らして像の崩壊する様をライブ中継した）も含めて、基調講演やプレゼンテーションなど、一般公開企画に対する地元市民の皆さんの反応も大変好意的でした。

これを機に、2009年度は東北公益文科大学との連携をいっそう強化し、またフィールドを鶴岡市から酒田市、さらには庄内全域に広げる方向で、鶴岡セミナーをより発展させた庄内セミナーの開催準備を進めつつあります。皆様のこれまで以上のご理解とご協力をお願いする次第です。

（プロジェクトリーダー　羽田　功）

三田の家

1. 概要

本研究は、地域社会と大学がキャンパスの外で直接結びつくことで新しい関係を生み出すことを目指す、各種の研究およびプログラムの総体を示している。そのうち、いくつかの活動については学生主体の活動の機会になるよう配慮している。

2.2008年度の活動報告

本研究では、「三田の家」を学生・大学教員・職員といった大学内部の関係者と、地域住民・商店主などの大学の外で生活している人々が一堂に会するインターフェース拠点として位置づけている。そして「三田の家」を舞台として、文化的、世代的、組織的に多様な人々が一堂に集う横断的交流を促すプロジェクトを展開した。なお、三田の家は、元来三田商店街と協働する形で発足している。そこで、特に三田地域の特徴を活かした新しい文化の創出を目指す活動に重点を置いた。

運営形態としては、三田の家では、活動メンバー各々が各曜日を担当する「マスター制」により運営している。この形式によって、原則的に平日は毎日オープンする体制をとっている。なお、2008年度の担当マスターとその主な活動テーマは以下の通りである。

月：手塚千鶴子（日本語・日本文化教育センター教授）留学生と日本人学生の交流機会の創出。

火：長田進（経済学部准教授）地域振興について考える機会の提供。

水：武山政直（経済学部教授）都市を舞台としたIT

メディア活用に関する諸活動。
木：坂倉杏介（DMC 機構専任講師）芸術と地域社会。地域コミュニティの形成。
金：岡原正幸（文学部准教授）社会学の実践。
土：渡辺久美（法学部学生）学生主体の活動。

なお、三田の家では、学生主体の外部への発表を支援している。この種の活動事例としては、2008年4月のメル・エキスポ2008（於東京大学）、2008年6月のカルチュラルタイフーン（於東北大学）での学生の発表が挙げられる。

また、三田の家で行われている各種活動全体については、2008年12月17日（木）に「大学地域連携シンポジウム――慶應義塾大学三田キャンパス周辺地域での取り組み――」の名でシンポジウムを開催した際に、広く公開した。

3. 最後に

以上手短かに報告を行ってきたが、本研究での取り組みに対する外部からの評価として、港区に評価された結果、区と義塾の包括協定を締結するきっかけとなった点を挙げることができる。そして、この中から、「芝の家」という、「三田の家」に続く新しい地域拠点を築くことになった。

この三田の家の活動は2009年度以降も継続する。活動の状況については、<http://mita.inter-c.org>を参照していただきたい。

（長田　進）

実験授業「現代の危機――宗教と民族問題」

2008年9月から12月にかけて計7回、日吉来往舎にて実施された実験授業「現代の危機――宗教と民族問題」は、2007年度まで行なわれた文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクトの下で、新たな教養教育のかたちを生み出すべく積み重ねられてきた議論の成果を、授業を通じて学生に還元しようとする試みであった。

テーマは上記プロジェクト内のコンテンツ研究ユニットのひとつであった「信じる？――現代の民族・宗教問題」を継続・発展させ、現在も世界各地で続発する民族・宗教問題について、ドイツ、朝鮮半島、日本、中東、中国といった様々な地域における具体的事例を歴史的背景にまで遡って論じ、学生にその根本的理解を促すことを目的とした。授業形式は、しばしば講師による受講者に対する一方的な情報提供に終わりがちな両者の関係性を双方向的なものに改めるべく、講義60分＋質疑応答30分という質疑応答を極端に重視した構成に加え、別途司会者を設けることで、両者の意見交換を促すかたちをとった。さらに、当該テーマに関する理解を深めるうえで参考になる資料を各講師が準備し、参加学生で構成されるメーリングリストなどを通じて事前に配布することによって、学生が受講前に自分の意見を準備し、積極的に議論に参加できるようにするためのサポートも行なった。

講師陣は、本実験授業の中核メンバーである長堀祐造（本塾経済学部教授）、関根謙（本塾文学部教授）、勝沼聡（東京大学東洋文化研究所非常勤講師）に加え、初見基（日本大学文理学部教授）、長原豊（法政大学比較経済研究所教授）、高柳俊男（法政大学国際文化学部教授）、柏崎千佳子（本塾経済学部准教授）、矢吹晋（横浜市立大学名誉教授）の各氏が講師・コメンテーターとして登壇し、授業を行なった（各氏の所属・身分はいずれも当時）。

結果、公開講義として会場をより大規模な場所に移し、数十名の学生の参加を得た矢吹氏の回をはじめとして、各回とも十数名の熱心な学生の出席を得て、毎回活発な議論が展開された。各講師の授業はいずれも、当該問題に関して流布している通説的理解の再考を促すような興味深い事実を含むもので、通説を安易に受容することなく、学生が自ら思考するための貴重な機会となった。同時に、各講師の授業によって通説的理解のくびきから解放された学生たちが、各講師の見解にさえ臆することなく自らの見解を披瀝し、互いに議論しあう場ともなった。以上のことから、本実験授業の実施によって、今後新しい教養教育を模索するうえでひとつの大きな示唆が得られたと考える。

（勝沼　聡）

プロジェクト――研究関連プロジェクト

基盤研究（1）カリキュラム研究

慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 ②――4年間を見越した教養教育の研究」

2008年度の基盤研究（1）カリキュラム研究は、2007年度からの研究課題「慶應義塾大学のカリキュラム研究 ②―― 4年間を見越した教養教育の研究」を継続し、今年度報告書を発行して終結した。

教養研究センターのカリキュラム研究は、学部間で連携を行いながら、教養教育の理念の深化を行うとともに、より効果的な教養教育のカリキュラム実現への提言を行うことを主な目的として展開してきた。2007~2008年度における同研究は、1）セメスター制の問題、2）成績評価の問題、3）発展型教養教育の問題（あるいは副専攻制の問題）を柱に遂行された。

研究活動内容

2008年度には、幹事会3回と、研究会7回（合宿1回を含む）を開催した。同研究は「成績評価問題」、「セメスター制度問題」、「継続的な教養教育の問題（副専攻制の問題を含む）」の課題をそれぞれ担当する3つのチームに分かれて調査・研究を進めていった。

本研究は、昨年度に引き続き、具体的で実行可能な提言を目指し、学内の諸事情に関する調査を行ってきた。「副専攻問題」に関しては、青木健一郎氏（経済学部・物理）による海外事例の講演（2008年5月26日）、「セメスター制度問題」に関しては、湘南藤沢キャンパスの事例、早稲田大学の事例を学ぶ講演会を開催した（講師：早稲田大学　教育システム課課長・オープン教育センター事務長　高木範夫氏、早稲田大学　教務部調査役　福井健介氏、湘南藤沢事務室　学事担当課長　松田健太郎氏、2008年6月8日）。また、「副専攻制度」に関しても、土方正夫氏（早稲田大学　オープン教育センター所長）の講演会を開催した。

また、この本研究を継続している間に「学部共通カリキュラム委員会」ならびに「日吉カリキュラム検討委員会」設置が決まったこともあり、これらの委員会に具体的なデータを提供するため、2003~2004年度期の基盤研究で行った日吉設置学部共通総合教育科目に関する調査（使用データは2001~2003年度）と同じ調査方法を用いて、2007年度および2008年度のデータの解析をおこなった。

報告書の作成

これらの調査・研究は、メンバー同士の非常に熱心なディスカッションの繰り返しを経た結果、年度の後半にかけ、今期の研究報告書のまとめの作業が急速に進み、最終的に「教養研究センター2007~2008年度基盤研究報告書『慶應義塾大学のカリキュラム研究②―― 4年間を見越した教養教育の研究』」（A4版、179頁）を発行することができた。

まず第1章では、上述通り日吉で行われている教養教育の根幹をなす学部共通総合教育科目の実態調査の結果を掲げた。ここでは、今後の諸科目間の運営に関する学部・諸研究所間での調整を円滑に行うために、その前提となる現状における設置科目の全体像を提示した。

次に第2章では、セメスター制の現状と問題点について考察した。セメスター制度は1990年代から文部科学省を中心に推進されてきており、慶應義塾大学でも1991年における湘南藤沢キャンパスの2学部では当初からセメスター制度が導入され、2005年度には三田・日吉キャンパスにおいてもいわゆる「通年半期制」が導入された。ここではセメスター制度の運用に関する学内における詳細な実態調査の結果を提示するとともに、セメスター制度をめぐる諸問題の論議を深め、その課題を整理するとともに直近に改善すべき提言を掲げた。

第3章では、成績評価の問題を扱った。今期の研究では、日吉キャンパスで展開されている具体的な事例の報告会とディスカッションを重ねて、その結果として、今回の研究では、分野特性を生かした成績評価方法の事例の雛形を提示し、その雛形に即した講義要項・シラバスの記入例を提示することができた。これらは、問題点の整理とともに、直近の改善に役立つものになると考えている。

第4章では、4年間を見越した継続的な教養教育のあり方について検討が行われた。

2005~2006年度報告書では、副専攻制の問題を取り上げたが、それを出発点として、現状のさまざまな少人数セミナーなどプログラムの特性を分析的に検討することによって、今後慶應義塾大学においてどのような継続的教養教育の展開と発展が可能かという問題を検討した。

なお、本報告書には、第Ⅱ部 資料編として、第1章に関連する日吉設置学部共通科目の現状についての調査結果資料である各科目のフィッシュ（資料

1)、第 2 章に関連する各学部における学期制の形の調査データ(資料 2)、および半期制の現状調査(文・経済・法・商・理工学部の詳細)(資料 3)、第 3 章に関連する資料(シラバスの原稿依頼書、資料 4)を添付している。

講演記録集の発行

2 カ年にわたる研究では、学内外の方々にさまざまな知見を講演していただいた。それらの講演記録集をまとめて併せて発行した(A4 版 133 頁)。

基盤研究の役割

2008 年 5 月 23 日の大学評議会で、「学部共通カリキュラム委員会」ならびに「日吉カリキュラム検討委員会」の設置が決定された。この 2 つの委員会は、日吉地区・三田地区に設置される総合教育科目や少人数セミナー等の円滑な運営と学部間の調整を行う重要な機関として新たに設置されたものである。この委員会の設置は、日吉主任会議が中心に提案してきたものであるが、これには教養研究センターがこれまで行ってきた「基盤研究における提言」も強く反映されている。両委員会は今後、慶應義塾大学における教養教育のますますの質の向上と発展に寄与する役割を担う機関として大いに期待されている。基盤研究「カリキュラム研究」の提言や、データは、今後の実際のカリキュラム検討に役立つものと思われる。

【研究会メンバー】
伊藤行雄(経済学部・ドイツ語・座長)、大場茂(文学部・化学・幹事)、坂上貴之(文学部・心理学)、坂本光(文学部・英語・幹事)、中島陽子(文学部・生物学、~2007.3)、柏崎千佳子(経済学部・英語・幹事)、林田愛(経済学部・フランス語)、不破有理(経済学部・英語、2008.10~)、村越貴代美(経済学部・中国語・幹事)、木俣章(法学部・フランス語・座長代理)、小林宏充(法学部・物理学)、横山千晶(法学部・英語)、佐藤望(商学部・音楽・幹事)、種村和史(商学部・中国語・幹事)、福澤利彦(商学部・生物学)、鈴木由紀(医学部・数学)、鈴木忠(医学部・生物学、2008.4~2008.9)、萩原眞一(理工学部・英語)、村山光義(体育研究所・体育・幹事)、倉舘健一(外国語教育研究センター・フランス語)

(伊藤行雄・佐藤　望)

プロジェクト――研究関連プロジェクト

基盤研究（2）「身体知プロジェクト」（総括）

1. 基盤研究「身体知プロジェクト」の研究目的

昨今「身体知」という言葉が語られはじめた。その言葉の呈する複雑さは、教育の場におけるこの新たな知の定義の必要性を突きつけると同時に、座学に限定されない知のあり方が現在求められていることを物語っている。危機と変革の時代には、全人的な知が必要とされるからである。

自分を知り、他者と交わる際、私たちは言語以外に身体を使う。同時に知を獲得し、理解し、伝える作業はすべて身体を経由している。つまり「身体知」は言語知･社会知の基盤とも言える。また、それは、単に肉体としての身体という意味のみならず、人間をホリスティックに捉えた上での身体であり、そこには精神性や感情の問題も含まれることになる。このような身体に対する議論の高まりの背景には、時代の突きつけるひとつの危機感があることは否めない。テクノロジーの波の中で希薄化する身体存在やコントロール不可能になってゆく精神と感情の不安の諸現象は、教育現場で切実に意識されているものであり､安易な解決策を許さない大きな問題である。

論理的思考力が感性や身体性と手を携えて初めて真の知性が生まれることは言を俟たない。考えることは、身体に触発され身体と不可分の全人的な行為以外の何ものでもないからだ。さらに､身体は､フーコー以降の現代思想でも、脳科学や認知科学でも、芸術や臨床心理学の領域でも、大きな注目を集めながら、それぞれが社会構成主義、科学主義、体験主義と異なる枠組で研究･教育が進められてきており、相互間の交渉が乏しかった。それぞれの成果を研究するのみならず教育の実践を通して統合する試みがなされるべき時がやってきた、と言えるであろう。つまり教育に関わる者が、人間の諸活動はすべて身体を抜きにしては語れないということを明確に再認識し、意識的に相互の壁を突き崩して統合的な教育を目指すことこそが、必要となる。

同時にそれらの知を伝える新たな授業の形態を模索する必要がある。慶應義塾においても、各領域でフィールドワークを取り入れた少人数授業やインターンシップのような体験型実務教育が徐々に広がりつつあり、大きな成果を挙げている。これらの新しい教育の試みを推進すると同時に、さまざまに効果的な授業形態の可能性を探ってゆくことが、大学教育の未来のために不可欠であろう。

教養研究センターでは、そのような見地の下に、21 世紀の中で私たちが再建もしくは発見すべき身体とは何であり、それをひとつの知とした上で次世代に伝えてゆくにはどのようにしたらよいのかを考える場として、2005 年 5 月に基盤研究「身体知プロジェクト」を発足させた。具体的には以下の手順で身体知教育の理論化を試み、広く外部に発信することをその目的として活動している。

1) さまざまな「身体知」のあり方の過去と現在を見据える。
2) 「身体知」教育の実践の場を視察し、実践者との意見交換を行う。
3) 実験授業を通じて「身体知」教育の意義と方法を探る。
4) 実践の成果を踏まえて新たな「身体知」および「身体知教育」のシステムデザインを行う。

これらの目的に沿って 2008 年度の「身体知プロジェクト」ではさまざまな実践の取組を研究するとともに、各分野で身体知の問題に取り組んでいる研究者たちとの研究会を引き続き開催し、同時に実験授業の実践を行うことで理論を試す場を構築した。また、この身体知プロジェクトの実践部分の一部は未来先導基金の採択プログラム「声プロジェクト」として展開された。こちらに関しては次項を参照されたい。2008 年度の活動は次の通りである。

2. 2008 年度の活動内容

(1) 月例研究会

本年度は学内で何らかの形で身体教育に関わっている研究・教育者に加えて、外部から身体知教育に関心を持つ芸術家や研究者を迎え、発表・議論・意見交換を行った。音楽、臨床心理学、体育の研究・教育者が、以下の日程で口頭発表をした。

2008 年 6 月 14 日　手塚千鶴子（本塾日本語・日本文化教育センター教授、臨床心理学）
2008 年 6 月 24 日　佐藤望（本塾商学部教授、音楽）
2008 年 7 月 24 日　村山光義（本塾体育研究所准教授、体育）
2009 年 1 月 20 日　月例研究会・実験授業合同振り返りの会（司会：武藤浩史）

尚、2008 年度後半は、「(2) 実験授業」の準備と実施、

および身体知教育の方法を用いた言語教育をテーマとする特定研究(「特定研究」の項を参照のこと)を立ち上げるために時間と精力が割かれ、月例研究会・実験授業合同振り返りの会を除くと、月例研究会は開催されなかった。

コーディネーターは、横山千晶(本塾法学部教授)と武藤浩史(本塾法学部教授)である。

(2)実験授業

2006年度に立ち上げた実験授業「体をひらく、心をひらく」の第3弾として、2008年10月28日から2009年1月20日まで3時間×7回(その他の回は11月4日、11月11日、11月18日、11月25日、12月9日)のセッションを行った。今年は「ボクってどこにいるの?」というサブテーマを設定し、ユーモアに満ちた美しい自己論でもある朝吹亮二の詩「たわしのわたし」をテキストにすることで、芸術言語と身体と自己の関係を体験的に追究した。作品解釈に朗読、創作、身体ワークショップをうまくミックスすることにより、よく動きよく感じつつよく思考することを可能にする効果的でユニークな方法を模索した。

「体をひらく、心をひらく――ボクってどこにいるの?」授業日程:

第1回(オリエンテーションと作品解釈と身体ワークショップ、講師 武藤浩史)
第2回(朗読、講師 岡摂子)
第3回(コラージュ、講師 佐藤仁美)
第4回(パントマイム、講師 すがぽん)
第5回(創作活動、講師 武藤浩史、横山千晶、佐藤仁美)
第6回(成果発表、司会 武藤浩史)
第7回(振り返りの会、講師 武藤浩史)

コーディネーターは手塚千鶴子、横山千晶、武藤浩史の3名である。参加者はこの3名を含めると、計38名に達した。

(3)月例研究会・実験授業合同振り返りの会

2009年1月20日に身体知プロジェクトの月例研究会と実験授業セクションが合同で振り返りの会を開催した。それぞれのセクションの活動を紹介しあい、一年間の活動を、秋の実験授業を中心として、振り返った。実験授業参加学生からも活発に意見が出され、実り多い機会となった。

(武藤浩史)

声プロジェクト

本活動は2007年度の未来先導基金の公募に採択された「『声』を考える」プロジェクトを引き継いで2008年度未来先導基金の採択事業として展開された。2007年度の活動報告書でも紹介されたとおり、2007年度のプロジェクトは、体験を通した教育カリキュラムの実践において大きな成果をあげた。2008年度は、これらのプロジェクトの成果を反映しつつ、引き続き論理的思考力の基礎となる感性や身体性をどのように既存の座学中心の教育現場に取り入れ、一貫教育から高等教育にまでいたるカリキュラム・モデルを提供することができるのか、その可能性を「声」を中心に考え、実践し、最終的に新たな教育モデルを提示することを目標とした。また、2007年度のプログラム実施の成果を踏まえて2008年度はさらに、志木高等学校の参加により、一貫教育の中での身体知導入のあり方を実践を通して考察した。今回活動を展開したのは以下の3つのプロジェクトである。

(1)「能」と「声」の授業

(コーディネーター　速水淳子[志木高等学校教諭])

志木高等学校では12年間、古典朗読を中心とした「声」の授業を実践してきた。今年は志木高等学校に学ぶ二年生の国語表現2クラス(各23名)において、朗読の授業を実施した。一学期は現代の詩や小説を中心に朗読し、その成果は、夏の学校行事である「志木演説会」に江戸川乱歩賞作家の高野和明氏が来られた際、舞台上で作家ご本人の前で高野氏作の「13階段」その他の小説をクラスの生徒たちが朗読した際に発揮された。

また夏休み前後の日程で、観世流能楽師清水義也氏を講師に招いて能の授業を行った。演目は牛若丸と弁慶の出会いの名場面、「橋弁慶」である。その成果として、10月には宮城県の登米能舞台で実際に「橋弁慶」を発表した。また運営に関しても生徒たちが力を発揮し、見事に能舞台をやり遂げた。10月以降は同じく義経をテーマにした「平家物語」の「宇治川の先陣」の場面を群読し、古典の響きを味わった。

この授業においての一番の成果は、まず生徒たちの声が格段に開かれたことが確信できたことである。能舞台後に群読した「平家物語」宇治川の先陣では、武将の名乗りの場面を校庭に出て学生一人一人

が朗読したが、実に迫力ある声が出ており、すべての生徒の喉が十分に開いたことを確認できた。「声」が開くということはそのまま生徒のからだが開くことにも通ずる。開かれたからだによる吸収力と理解力の相関関係もこの授業を通じてはっきりと確認することができた。今後も能の授業を続けることにより、言葉を十全に響かせることのできる声を学生に獲得させたい。それと同時に、一人ひとりが自分の声と出会うことを目標に授業を展開していきたい。そのためにはもっと作品を読み込む必要がある。今後は、声を表現として出していく段階を追求していくことが目標となろう。

(2)声と身体と歴史文化の接点を探る教育の実験——大学教養教育における歴史と文学

（コーディネーター　横山千晶[法学部教授]）

2007年度の未来先導基金採択事業の一環である、夏季集中実験授業(「新しい文学教育」)の成果を受けて、引き続き行ったものである。今回は「地域文化論」の履修者（法学部設置「地域文化論Ⅰ・およびⅢ」、全学部で単位認定）をおもな対象として、夏休みの1週間（2008年8月7日から13日まで。一日90分×2コマ）に歴史ユートピア小説（ウィリアム・モリス作『ジョン・ボールの夢』[1888]）を使った「声」の集中授業を行った。ここでは、さまざまな「声」と「場」および「歴史」をつなぎ合わせる授業を目指し、音楽家、演出家、俳優などの多彩なゲストを招いて授業を行った。具体的には、バラッドなどの音楽や唄・詩などの身体表現を、言語表現と平行して体験する以外、体験と歴史小説を交えるワークショップとして、アーチェリーの実践も取り入れ、文学や歴史とのかかわりを参加者は体感した。そして、最終回には2007年度の実験授業同様、体感したことをふたたび言語化する活動として個人の創作を行った。これらの活動により、座学に偏りがちな知の伝達を敢えて時間をとって身体を通して行うという一つのモデルを形成する可能性を確信できた。各日の講師陣は以下のとおり。

（各日のスケジュール）

1時間目(10：00~11時半)
2時間目(11時45分~13時15分)

8月7日(木)「『ジョン・ボールの夢』を語る」その1
授業の趣旨とスケジュールの説明およびディスカッション
（コーディネーター　横山千晶）
「『ジョン・ボールの夢』を語る」その2
ディスカッション（コーディネーター　横山千晶）
8月8日(金)「ジョン・ボールと語ろう」その1
演劇ワークショップ　（講師　松井周［青年団、劇作家・俳優・演出家］）
「ジョン・ボールと語ろう」その2
演劇ワークショップ　（講師　松井周）
8月9日（土）「ジョン・ボールになってみよう」
その1　声のワークショップ(講師　坂口芳貞［文学座、桜美林大学教授、俳優・声優・演出家］)
「ジョン・ボールになってみよう」
その2　声のワークショップ　（講師　坂口芳貞）
8月10日(日)休み
8月11日(月)「連歌を作ろう」　歌のワークショップ
その1（講師　佐藤仁美[放送大学准教授]）
「歌と語りの創作ワークショップ」
8月12日(火)「バラッドを歌ってみよう」　歌のワークショップ　その2（講師　永田平八[リュート奏者、作曲家]）
「バラッドを作ってみよう」(講師　佐藤望)
8月13日(水)「アーチェリーを体験してみよう」
(9時~11時半)（講師　川西大介［体育研究所非常勤講師］）
「創作発表会」(音楽指導　永田平八)
および懇親会「fellowshipに乾杯！」

授業最終日にはアンケート調査を行い、非常に高い評価を参加者から得ることができたのみならず、事例報告として、学会で口頭発表を行ったり、論文として発表することで、大学内外からも高い評価を得ることができた。来年度はさらに新しい素材を使ってこの試みをつなげ、カリキュラム化を図る道筋を整えたい。

(3)声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践——大学教養教育における音楽実践

（コーディネーター　佐藤望[商学部教授]）

2007年度の未来先導基金採択事業に引き続き声と楽器に実践を取り入れた授業カリキュラムを実行した。音楽を通じ歴史・文化・言語の総合的な学習

の機会とすることを目標とし、総合教育科目「音楽」の2クラスを利用して、春・秋学期を通じて演奏訓練と歴史・文化の学習を声と身体の学びと絡めて進めていった。本年度は慶應義塾創立150年を飾るにふさわしいバッハの祝祭カンタータ214番《太鼓よとどろけ！　ラッパよ鳴り響け！》を中心としたプログラムで成果発表演奏会を、2009年1月7日に協生館藤原洋記念ホールにて開催した。学内外から定員500名のホールを満席にする人が集まり100名以上が入りきれなくなるほどの盛況であった。演目は以下のとおり。

J. S. バッハ　カンタータ　≪太鼓よとどろけ！ラッパよ　鳴り響け！≫
H. シュッツ　シンフォニア・サクラ集Ⅲより
〈古い酸いパン種を取り除きなさい〉
〈種まく人が種まきに出て行った〉

(2) の文学の実験授業プロジェクトでも実感できたことであるが、慶應義塾に集う様々な学生を身体を通してつなぎ合わせることが、教育の成果においても重要な意味を持つことは、この音楽のプロジェクトでも同様に実感できた。今回のプロジェクトでは彼らがともに学びあい、それぞれの楽器やパートを担いあい、よりスキルのあるものが初心者に指導しながら、半学半教を実践する授業を展開した。17～18世紀のドイツ音楽というものは、学生にとって非常に縁遠いものであったが、歴史文化に育まれた音を自らの体で再現する、という地道な作業を通じて、人間の精神文化の奥深さと異文化を、身体を通じて理解する学びが展開できた。学生の反応も一様に、ひとつのものを協働して作り上げた達成感を喜ぶものであった。また、今回の演奏会は横浜市の「クラシック・ヨコハマ」の一環としても認定され、ドイツ大使館の後援も受けて開催された。この意味で、大学と地域との連携のモデルを提示することもできたと考える。

以上、文学を身体を通して読み解くという教育や、音楽実践を取り入れた大学教養授業は、全国でも世界でも先進的な取り組みである。これを義塾において授業として定着させることには、大きな意義がある。同時にそのメソッドをさらに広く公表する活動を今後展開する必要がある。音楽の授業では今回、プロの演奏家をソリストとして加えて音楽を作り上げたが、楽器演奏や歌唱が必ずしもできない学生に対しても、プロの演奏家を招いて歴史や身体性の意義を教える新しいプログラムも今後展開していきたい。文学の実験授業でも音楽家などさまざまなプロが教育に関わることで新たな教育の視座が提供された。今後も専門家とのコラボレーションを教育の場に生かす方法を模索する必要があろう。

そして最も重要な今後の目標は、これらの試みを総括して、初等教育から高等教育までにわたる教育モデルとして提示することであろう。

（横山千晶）

芸術教育を考える

2008年度の基盤研究「身体知プロジェクト」における「芸術教育を考える」の部門では、これまで展開してきた音楽教育を中心とした企画を継続する一方で、新たな実験授業の企画を進めていった。

旧来からの継続事業としては、「声プロジェクト」やHAPP、日吉音楽学研究室と連動してきた音楽授業発表会の企画（2008年7月9日、2009年1月7日実施）の成果をさらに発展させ、地域連携、身体をつかった体験型授業の実践の成果をあげていった。

また、2008年度は、2009年度秋学期に開催予定の新たな実験授業の準備を展開した。具体的には、優れた弦楽合奏団であるクァルテット・エクセルシオと協働し、「声と身体と歴史文化の接点　その2――演奏家とのコラボレーションによる授業実践『楽器の声に託された生と死』」の企画を立てて、慶應義塾創立150年記念未来先導基金に応募したことである。（同企画は「声プロジェクト」の一環として同基金の事業として採択された。）これは、身体と歴史文化との接点を探求する新しいタイプの試みである。こうした芸術教育と身体知の理念と教育メソッドを、実践を通じて打ち立てていくことを目的とし、着実に発展を遂げている。2008年度メンバーは、武藤浩史（法学部）、横山千晶（法学部）、大和田俊之（法学部）、高橋宣也（文学部）、新谷崇（法学部）、佐藤望（商学部）。

（佐藤　望）

一般研究

KeioNetMath 構築による数理科学の総合的研究

研究代表者　戸瀬信之（経済学部）

Ⅰ．研究概要

慶應義塾内では、数学および数理科学の研究者が各学部に分かれて配属されている。そのため、大学内を一つにみると教育資源・研究資源は他の私立大学と比べても何ら遜色がないが、残念なことに学部の垣根を越えた数学・数理科学・統計学の教育・研究の方向性が定まっていないのが現状である。慶應義塾の教育・研究に関する現状の枠組みの中において、この現状に関する問題点をできる限り改善するのが本研究の目的である。

Ⅱ．2008 年度の活動報告

(1) 数学の教育リソースの共有の試み

学部間、キャンパス間、さらには大学間の障壁を越えて、数学・数理科学・統計学の教育リソースをインターネット上で共有する基盤的な研究を繰り返し行った。2003 年度から 5 年間の間継続したプロジェクトである、21 世紀 COE「統合数理科学」の Pathways Lectures などの大学院生向けの集中講義をインターネットビデオとして公開する事業を引き継いで行った。

(2) 演習問題や Presentation File の作成

数学は抽象的な思考の学問と考えられているが、それとは裏腹に、数学の学習には具体性のある多くの例に触れる必要がある。それは、アルゴリズムの体感的な理解を深めたり、様々なオペレーションの意味について理解を促すためなどに不可欠なプロセスである。ところが、この 20 年間にわたって続く若年層の学力低下に従って、慶應義塾における数学教育は時間的に余裕がなくなってきているために、演習問題を深く解説する時間がなくなってきている。この困った状況を少しでも改善するために、多くの科目の「オンライン問題集」を作成して、インターネットで公開した。また、新しい時代の数学教育の実現に向けて、PDF 形式の Presentation ファイルを用いた講義ノートを作成してインターネット上で公開した。

Ⅲ．研究成果と課題

(1) オンライン問題集

以下の科目のオンライン問題集を作成した。

＊総合教育科目「経済数学入門」 http://www.math.hc.keio.ac.jp/index.php?exo2008a

＊基礎教育科目「微分積分入門」、「微分積分」 http://www.math.hc.keio.ac.jp/index.php?exo2008b

＊専門基礎科目「経済数学 I、II」 http://www.math.hc.keio.ac.jp/index.php?exo2008c

＊東京大学の文系の線型代数学 http://www.math.hc.keio.ac.jp/index.php?komalinexo2008

これらは問題文を MimeTex という数式インターフェースを用いて表現しており、また解答はすべて PDF 形式で与えてある。

(2) 経済数学の教育の改善

経済学部の伊藤幹夫と戸瀬信之は、経済学部生のための数学教育の改善を目指して、教育リソースのインターネット上への展開と発信を行った。2007 年度に構築した Wiki サーバーを用いて、様々なハンドアウトをインターネット上に公開した。それと同時に、数式を含む PowerPoint のような Presentation ファイルを PDF 形式で実現して、それを用いて多くの教材を開発してインターネット上に公開した。また、この数年間の教育の改善に関する議論を集約して学部 3、4 年生を対象とする経済学とファイナンスのための数学の教科書

『経済学とファイナンスのための基礎数学』（伊藤・戸瀬著、共立出版）

を出版した。今後は、金融工学の入門的な教科書を総合教育科目「ファイナンス数学 I、II」の講義などをもとに公刊する予定である。

(3) 線型代数のインターネット上のコースウエアの公開

経済系の学生むけの半期の「線型代数」の講義のコースウエアをインターネット上に公開した。Presetnation ファイルに演習問題の解答を加えたものである。これは、経済学部 2 年生の復習用を意識

して作成してある。URL は
http://www.math.hc.keio.ac.jp/index.php?Komatra2008
である。

(4) 数式表現のインターネット上での実現

数式を含んだ文書をインターネット上に効率的に公開することを継続的に試みた。TEX を用いて作った文書を PDF にして公開するのが、通常行われている方法である。ところが、これでは HTML 形式を用いて記述された通常のウエブページとの親和性がかなり低くなる。これは、ヘッダーや問題文などの短い文章が数式を含む場合により必要となるからである。この課題に関して、2007 年度には TEX ソースをそのまま使える js Math スクリプトを導入して実験を行った。また、MathML 形式でコーディングする実験も行っていた。MathML に関しては、ブラウザー側に数学用のフォントやプラグインが必要ということで、まだ実用には少し程遠く、jsMath に関しては少し不安定な面もあった。そこで、2008 年度に関しては MimeTex を用いて多くの実践を行った。「オンライン問題集」の問題の記述はすべてこの MimeTex を用いて実現した。この MimeTex は、TEX のソースで数式を記述できるので、これまで LaTex 形式で書いてあった演習問題の原稿を用いて「問題集」を作るのに最適であった。また、画像フォントを tex のソースから生成してウエブ上に配置することを Wiki サーバーが自動的に行ってくれるので、クライアント PC 側にはブラウザーがあれば数式を見ることができるので、学生が簡単に閲覧できる環境が実現できた。

【研究メンバー】
戸瀬信之(経)、厚池　淳(経)、太田克弘(理工)、栗原将人 (理工)、前田吉昭 (理工)、森吉仁志 (理工)、小木曽啓示 (経)、宮崎直哉 (経)、仲田　均 (理工)、田村昭久(理工)

可積分系の代数解析学

研究代表者　池田　薫（経済学部）

Ⅰ．研究概要

可積分系とは微分方程式系の中で有限回の代数的な操作と不定積分を繰り返すことにより解を得ることができる方程式のことである。今回の研究では特に 20 世紀中ごろから爆発的に研究の進んだいわゆるソリトン方程式系とよばれる非線形の可積分系に焦点をあてた。ソリトンの研究は 19 世紀の中頃スコットランドの科学者であるラッセル卿による、運河をいつまでも形を崩さずに渡る波の観察から始まった。それは従来知られていた線形波動方程式 u_xx-c^2u_tt=0 では記述できないものであった。その後 19 世紀も押し迫ったころオランダの 2 人の数学者コルトヴェーグとドゥフリースがこの孤立波を記述する方程式を見つけた。それが彼らの功績を称え頭文字を採った KdV 方程式である。KdV 方程式は非線形方程式であるため解くのが困難で、発見当初楕円関数解などいくつかの解が発見的に見つかった程度であった。しかし 20 世紀半ばプリンストンのグリーン、ガードナー、クルスカル、ミウラなどが KdV 方程式の解をポテンシャルに持つシュレディンガー作用素の固有値が時間変数に依存しない保存量であることを発見し逆散乱理論を使いいわゆる多重ソリトン解とよばれる一連の解を系統的に導いた。また KdV 方程式を 2 次元に拡張した KP 方程式も KdV 方程式と同様に逆散乱の理論を使って多重ソリトン解を系統的に導き出せることが分かった。佐藤幹夫先生はこの KP 方程式は無限個の保存量を有しているので、ある種の無限次元空間の中の軌道として描けるのではないかという着想を得た。その着想から無限次元グラスマン多様体の理論に行き着いた。この佐藤先生の発見により可積分系の研究も代数解析的観点からの研究が可能となった。今日世界の多くの数学者、物理学者を虜にする方程式に戸田格子がある。名前から分かるようにこの方程式の発見者は日本人戸田盛和である。戸田格子とは指数関数の力で引き合う粒子系を記述する方程式であるが不思議なことにまったく関係がないように見える KdV 方程式や KP 方程式と同様に逆散乱理論を用いて多重ソリトン解が得られる。戸田格子はすべてを行列で表現できることから表現論の研究者（例えば MIT のコスタント）らにより表現論の観点からの研究が行われ、ディンキン図形に対応する一般化が行われた。ソリトン方程式の可積分性はそれが持つ無限個の保存量が保障する。戸田格子は他の可積分系に比べ代数的であるためこの保存量の正体をはっきりした形で把握できる。それは群の不変量である。戸田格子の保存量はいわ

ゆるシュバレー不変量に当たる。 近年戸田格子を一般化したフルコスタント・戸田格子の研究が盛んである。 なぜ盛んなのかというとフルコスタント・戸田格子は従来のシュバレー不変量の他に k- チョップ積分と呼ばれる保存量を有している。 この k- チョップ積分はラックス行列の k- 切断行列式から得られる保存量である。 k- 切断行列式はある放物型部分群の余随伴作用による相対不変式である。 私の知る限りこの相対不変式は今までに知られていなっかたものである。 相対不変式はこれも佐藤先生が創始された概均質ベクトル空間の理論の中で中核を占めるものである。 今回の研究の中でこの k- チョップ積分に関する時間発展の研究も行なった。 数理物理学はもとより代数解析、微分幾何学、フーリエ解析、表現論、整数論、確率論などへの幅広い発展が期待できる。

Ⅱ. 2008 年度の活動報告

2008 年 7 月 30 日から 31 日まで日吉来往舎において本プロジェクト構成員である児玉裕治教授による特別講義「実 Grassmann 多様体のコホモロジーと KP 方程式系」が行われた。またこの特別講義に関連する形で上記日程でミニワークショップ「可積分系への幾何学的アプローチ」を開催した。

Ⅲ. 研究成果と課題

本プロジェクト構成員による研究成果

M.Katsurada,T.Noda, Differential action on the asymptotic expansions of non-holomorphic Eisenstein series, to appear

----------, An explicit formula for the zeros of the Rankin-Selberg L -functions via the projection of C^{∞} modular forms, Kodai Math.Jour.31 (2008), 120-132

K.Ikeda, The monoidal transformation by Painlevé divisor and resolution of the poles of the Toda lattice, Jour. Math. Pure Appl. 90 (2008) , 329-337

----------, The algebraic integrability of the quantum Toda lattice and the Radon transform, Jour. Fourier Anal. Appl. 15 (2009), 80-100

Ⅳ. 次年度への展望

研究概要でも述べたとおり今回の可積分系の研究は様々な分野と広く深く繋がっている。 研究プロジェクト構成員との連絡を密にして情報交換を活発に行い、研究成果を今年度以上にあげて行きたい。

【研究メンバー】

池田　薫(経)　厚地　淳(経)　桂田昌紀(経)　宮崎直哉（経）　児玉祐二（オハイオ州立大学）Pol van Haecke（ポワチエ大学）　Babara Shipman（テキサス大学アーリントン校）　天羽雅昭（群馬大）　野田工(日大)

総合的な視野から見た環境問題解析と環境教育の試み

研究代表者　秋山豊子（法学部）

Ⅰ．研究概要

環境問題は、現代社会において重要かつ緊急な問題となってきた。環境問題を理解し、解決策を探ることは、現代を生きるうえで誰でも直面する問題である。しかし、この環境問題を正確に理解し、対策を検討するにはさまざまな分野からの視点が必要である。本共同研究は、法学・経済学・物理学・化学・生物学・地域研究の有志の教員が、一堂に会して同じ環境問題を議論し、総合的な理解からその対策を検討する研究会を10年以上にわたって継続しており、その研究会での議論を中心活動としている。その結果を研究会やホームページを通して、環境問題に取り組もうとする学生・一般人に公開し、環境問題にはバランスの取れた多様な視点が必要であることを提示していく事を目的としている。学生とともに真鶴港や西表島などに現地調査を行い、実際の具体的な汚染度の調査や対応策の検討なども行なった。

Ⅱ.2008度の活動報告

2008年度は関心のある教職員・学生に公開した研究会を教養研究センターの研究室を利用して以下のように実施した。また、三田キャンパスにおいて、国際センターが企画する海外研修のクラス向けの事前準備の講義もこの研究会の教員メンバーの大部分が参加して実施し、好評を得た。

①4月24日（木）　木質系バイオマスの利活用（小林）
②7月10日（木）　7月12日の打ち合わせ
③7月12日（土）　16:00~17:30　「森林と環境問題」三田515教室にて講義（講義：大平、秋山、小林、六車、浅野、出席；金谷、一の瀬）
④9月24日（水）　日本の都市鉱山開発（一の瀬）
⑤11月13日（金）　西表島と環境問題（秋山）
⑥2009年2月25日（水）来年度開講の環境問題関連の授業（自然科学総合講座II）の打ち合わせ

その他、真鶴（横浜国立大学人間科学部理科教育施設）と西表島（琉球大学熱帯生物圏研究センター西表実験所）において学生とともに環境調査を含む実習を行った。

Ⅲ．研究成果と課題

研究会は、2007年度から研究会を公開して効果を広げてきた。研究会のテーマは上記参照。公開した際は、ほぼ毎回学生や司法修習生などの参加があった。班員の企画で、興味のある学生を募って真鶴港や西表島へ臨海実習と現地調査を行った。これまでの研究会のレジュメはホームページに掲載した。この作業は、共同研究室を使用して行った。成果として、国際センター主催の海外研修の事前準備としての講義の提供、「木質系バイオマスガス化発電システムの検討」、（小林宏充、木質系バイオマスエネルギー利活用研究事業報告書、はままつ産業創造センター、pp.79-88、2008）、「一貫校合同による夏期臨海実習II」（秋山豊子・四宮愛他；2009年　慶應義塾大学日吉紀要自然科学編　45号15-29）、「西表島実験授業報告II」（秋山豊子・四宮愛他；2009年　慶應義塾大学日吉紀要自然科学編　45号　31-53）などがある。

Ⅳ．次年度への展望

本年度は、この「一般研究」の3年目であるため、この「一般研究」はいったん終了するが、有志による研究会は継続していく。新たな視点から共同研究を企画し、これまで通り約2ヶ月に1度の研究会、学生を伴う環境汚染の現地調査などを継続して行く。これまでの集大成として、2009年度秋学期に「自然科学総合講座II」として環境問題を取り扱うオムニバス方式の授業を開講する。テーマは、物理学、生物学、土壌学、経済学、法律学、政治学などからみた「地球温暖化」、「環境の変化」、「環境変異原」、「エネルギー問題」などである。また、興味のある学生を募って、真鶴や西表島での水質・大気・土壌汚染の現地調査と、それらの問題の解析と対策の検討などを試みる。

（7月12日の講義で秋山が使用した資料を添付する。）

【研究メンバー】
秋山豊子（法）　六車　明（法科大学院）　小瀬村誠治（法）　大平　哲（経）　小林宏充（法）　浅野眞希（法）　四宮　愛（法）　林　志野（司法修習生）

日本と世界の森林　―生物学の視点から―

法学部・生物学教室　秋山豊子

『文明は森に最初に斧を入れたときに始まり、森がなくなったときに消滅する。』　と言われている。

日本の森林

《森林面積》国土の 67％で、世界でも有数な森林国。

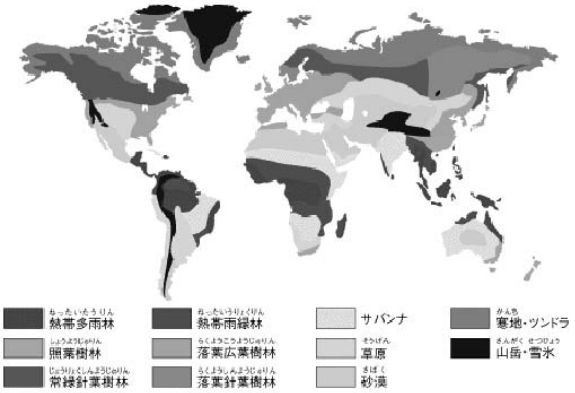
《森林分布》以下のような地域に分かれ変化に富む。

亜寒帯・亜高山帯の常緑針葉樹林；シラビソ、ツガ、エゾマツ、ハイマツ、
冷温帯・山地帯の落葉広葉樹林、ブナ、ミズナラ、トチノキ、ハウチワカエデ
暖温帯・低山帯の照葉樹林；スダジイ、アラカシ、タブノキ、ヤブツバキ
亜熱帯の亜熱帯多雨林；ガジュマル、アコウ、ヘゴ、マングローブ
（世界自然遺産の森林は？）

《天然林と人工林の面積の推移》　原生林の後に二次林が回復して水源として維持されたり、急峻な山地のため伐採されずに残ったりなど、森林面積はあまり変化がないが、種類は成長が早く経済効率の高いスギやヒノキの人工一斉林が多くなった（森林の 40％）。（３大美林として知られるのは？）

《国有林と民有林の面積》　国有林は３割。その他は公有林や私有林（民有林）。私有林は木材生産などが目的だが、林業の衰退により放置された林が多い。

《森林被害の推移》　日本の森林被害は気象災害、病虫害、獣害、火災など。特に台風や地震・大雪などによる気象･災害被害が大きな問題。その理由は、手入れ不足で弱い森林が増えたこと。



出典：IPA「教育用画像素材集サイト」　http://www2.edu.ipa.go.jp/gz/

【世界の森林の問題】

・歴史的には「豊かな森林」⇒「農業や牧畜のために森林を開墾」⇒「工業化のために森林伐採・破壊」⇒「災害の多発」⇒「森林の保護・育成」へ

・現在は、熱帯林の減少（木材資源としての伐採、人口増加による農地開発、焼畑、薪の採集、動物の被害、道路やダムの建設）酸性雨による森林枯死

【これから望まれる森林の例】複層混交林…. 混交林や異齢林など多様な森林　（雑木林）

【森林の多様な機能】

①　森林は、木材としての資源やバイオマスとしてのエネルギーを提供
②　生物多様性保全機能…遺伝子保全、生物種保全、生態系保全
③　地球環境保全機能…地球温暖化の緩和(CO_2吸収、化石燃料代替)、地球気候システムの安定化
④　土砂災害防止機能…表面侵食防止、表層崩壊防止、その他土砂災害防止、雪崩防止、防風、防雪
⑤　水源涵養機能…洪水緩和、水資源貯留、水量調節、水質浄化
⑥　快適環境形成機能…気候緩和、大気浄化。快適生活環境形成
⑦　保健・リクリエーション・文化機能....療養、保養、行楽、スポーツ、景観･風致、学習･教育、芸術など

《最後に提案；あなたが好きな木の名前を 5 つ挙げてみよう》それらがアメリカでも見られるかどうか？

参考文献；「人間にとって森林とは何か」菅原　聡　講談社ブルーバックス、「木に会う」高田宏　新潮社

意味フレームに基づく日英バイリンガル語彙データベースの構築

研究代表者　小原京子（理工学部）

Ⅰ．研究概要

話者が言葉を用いる際に想起する背景知識「意味フレーム」を「中間言語」として、日本語と英語の語彙項目とを対応付けて、日英バイリンガル語彙データベースの雛型を構築する。そのコンテンツは、1）意味フレームを介して対応付けられた英語と日本語の語彙項目、2）意味フレーム定義、3）コーパスから抽出して意味タグ付けした例文、である。

従来のバイリンガル辞書は、入力言語の見出し語を直接ある訳語に対応付ける。しかしながら、これまでの語彙意味論研究や翻訳論で明らかになったように、ある言語のある語彙項目のもつ多義構造と、一見その語彙項目に対応する別言語の語彙項目の多義構造が完全に合致することはまれである。そこで本研究では、日常活動を通じて形成された典型的場面についての構造化された知識である意味フレームを介して、日英語の語彙項目を対応付けることを目的とする。そして、利用者が状況に応じた的確な訳語とその訳語に適切な構文を見つけることができるようにする。

Ⅱ．2008年度の活動報告

現在本研究代表者らが構築中の日本語フレームネット、ならびにアメリカ・カリフォルニア州バークレー市のInternational Computer Science Instituteで構築中の英語フレームネット双方でアノテーションが充分進んでいる意味分野とそれに属する語彙項目について、日英バイリンガル語彙データベースの雛型の構築を試みている。2008年度は、特に「感情」、「感覚」の概念に関する語彙項目を対象とした。2008年度は動詞、形容詞を主な対象とした。

以下の3つのグループに分かれて研究を遂行した：

1）言語分析担当：日本語フレームネット構築（アノテーション）、英日の語彙項目対応付け
2）ツール類担当：データベースやソフトウェアツールの管理・開発
3）バイリンガルデータの検索表示担当：データベース検索表示プログラムの開発

具体的には、以下の活動を行った：

●全体会議
⇒計3回（2008/4/23、7/16、2009/3/31）
●定例会議
⇒データベース・システム関連：合計21回
⇒アノテーション関連：合計23回
●共同研究打ち合わせ
⇒2008年8月カリフォルニア州バークレー市International Computer Science Institute英語フレームネットチームを訪問し、研究打ち合わせ・共著論文執筆
⇒2009年3月カリフォルニア州バークレー市International Computer Science Institute英語フレームネットチームを訪問し、研究打ち合わせ・共著論文執筆
●国際学会
⇒2008年5月第6回国際言語資源評価学会にて成果発表（モロッコ・マラケシュ）
⇒2008年8月第5回国際構文理論学会にて成果発表（米国・テキサス大学オースティン校）
●国内学会
⇒2008年9月日本認知科学学会第25回年次大会にて成果発表（同志社大学）
●国内発表
⇒2008年12月慶應テクノモール2008（第9回慶應科学技術展）に出展（東京国際フォーラム）
●塾内発表
⇒2008年11月Hiyoshi Research Portfolio 2008に出展（慶應義塾日吉キャンパス来往舎）

Ⅲ．研究成果と課題

＜研究成果＞

英語・日本語フレームネット上に既に定義された語彙項目の対応付けに関しては、英語・日本語フレームネット双方のデータを、意味フレームとオンライン上のバイリンガル辞書を用いてリンクさせた。また、本研究メンバーの佐藤弘明氏（専修大学）の開発したFrameSQLで検索表示できるようにし、インターネット上に公開した（http://sato.fm.senshu-u.ac.jp/jfn21/notes/index.html）。

また、以下の学会発表・論文発表を行った：

● Hasegawa, Yoko, Kyoko Hirose Ohara, Seiko Fujii, Russell Lee-Goldman, and Charles J. Fillmore（2008）“Constructions for measurement and comparison in Japanese and English.” Presented at the International

Conference on Construction Grammar 5, University of Texas-Austin, September 28, 2008.
● Ohara, Kyoko Hirose（2008）“Representing lexicon and grammar in Japanese FrameNet”, Proceedings of the 5th International Conference on Construction Grammar, University of Texas, Austin, USA, September 28, 2008.
● Ohara, Kyoko Hirose（2008）“Lexicon, Grammar, and Multilinguality in the Japanese FrameNet”, Proceedings of the 6th International Conference on Language Resources and Evaluation（LREC2008）, CD-ROM.
● Saito, Hiroaki, Shunta Kuboya, Takaaki Sone, Hayato Tagami, Kyoko Ohara（2008）“The Japanese FrameNet Software Tools”, Proceedings of the 6th International Conference on Language Resources and Evaluation（LREC2008）, CD-ROM.
● Sato, Hiroaki（2008）“New Functions of FrameSQL for Multilingual FrameNets.” Proceedings of the 6th International Conference on Language Resources and Evaluation（LREC2008）, CD-ROM.
●小原京子（2008）「コーパスに基づく日本語主観移動表現のフレーム意味論的分析 : 英語との比較から」日本認知科学会第 25 回大会発表論文集、pp. 16-17。
●小原京子（2008）「日本語主観移動表現のコーパス分析 : 英語との比較から」『慶應義塾大学日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』、第 40 巻、pp.107-122。
● Ohara, Kyoko Hirose（2009）“Lexical and Constructional Meaning in Japanese FrameNet”『慶應義塾大学日吉紀要　英語英米文学』第 54 号、pp.45-58.

＜課題＞

日英バイリンガル語彙データベース内の語彙項目を品詞の種類の点からも意味分類からもさらに多様にすると同時に、語彙データベースの規模を大きくすることが今後の課題である。そのために、アノテーション作業の迅速化やマニュアル化、アノテータ要員の増員・養成が必要である。また、英語フレームネットの最新版データをインポートし、なおかつ日本語フレームネットの既存データとの整合性を如何にとるかを今後は検討していく必要がある。さらに、日英両言語の語彙項目間の対応だけでなく、意味フレームの概念を用いた日英語の構文間の対応についても記述していく必要がある。

Ⅳ．次年度への展望

英語の最新版データと最新版ツールを取り込み、日本語データとの対応付けを行う。日英バイリンガルデータを検索表示した場合の語学学習と翻訳における応用やメリットのアセスを行う予定である。また、これまでの成果発表を行いつつ、アノテーションマニュアルと活動報告書を作成する。

2009 年度は、英語の最新版データと最新版ツールを取り込み、日本語データとの対応付けを行う。また、動詞・形容詞に加え、副詞・名詞の語彙も分析･アノテーションする。さらに、語彙項目に加え、日英語の構文間の対応付けのためのパイロットスタディも試みる。

【研究メンバー】
小原京子（理）、鈴木亮子（経）、斎藤博昭（理）、石崎俊（環境情報）、藤井聖子（東京大学大学院総合文化准教授）、佐藤弘明（専修大学商学部教授）、神野雅代（四天王寺国際仏教大学人文社会学部准教授）、木越壽子（言語アナリスト）

胚発生三次元教育学術情報データベースの開発

研究代表者　堀田耕司（理工学部）

Ⅰ．研究概要

生物の形は細胞レベル・組織レベルそして個体全体に至る異なる階層一つ一つが互いに連携することによって、全体としての形をつくりだしている。そこで発生の理解のためには細胞から個体まで従来縮尺の違いから分けて考えがちな生命現象を三次元的に同時に解析するための基盤が必要となる。そこで本研究では近い将来の生命科学教育研究における革新的なプラットフォームとして個体全体を一細胞レベルで見渡せる三次元画像データベースの研究開発を行っている。このデータベースは教育材料として以下の効果が期待される。1）生物発生の視覚的理解を助ける。2）生物を扱った経験が少ない学生や生物標本が入手困難な場合でも、生物の発生の疑似観察

ができる。3）高価なレーザー顕微鏡などがない、あるいは生物を解剖する施設などがない学部・学科においても学内 LAN を通じて使用可能である。4）細胞レベルと個体レベルの生命現象を互いに結び付けて理解することができる。このように本データベースは生物学を学ぶ本学の学生の理解を助けるだけでなく、デジタルとウェットな実験の結びついた新しい生物学領域における研究者を育てる上でも大いに役立つことが期待される。

Ⅱ .2008 年度の活動報告

2007 年度の受精卵から孵化幼生まで記載したホヤ胚三次元データベース FABA（http://chordate.bpni.bio.keio.ac.jp/faba）データベースの公開につづき、2008 年度は孵化後から変態過程を経て成体に到る発生段階を含むデータベース FABA2: Four-dimensional Ascidian Body Atlas Ver.2 の開発を目指した。ホヤは受精後約 18 時間で孵化し、遊泳幼生となる。孵化後、数時間遊泳した後、幼生は変態という現象を経て固着性の成体へと大きく変化する。本研究ではホヤ変態過程を細胞レベルで明らかにし、どのようなタイミングで特定のイベントが起きるのかというタイムテーブルを定め、共焦点顕微鏡を用いた個体全体の一細胞レベルのイメージングとタイムラプスイメージングを行なった。これら撮影した画像をレンダリングソフトウェアを用いてパソコン上で三次元再構築した。この作業はおよそ週に 1 度、研究室を使用し継続的に行った。その結果、Z 軸方向断面画像および三次元画像の両データセットを作成することができた。つづいてこれらのデータセットのアノテーション作業と WEB への組み込み作業を同じく研究室を使用し行った。アノテーションには時間軸と形態的な発生ステージとの対応を明確にし、形態的な組織、細胞運命、細胞系譜、細胞分裂、誘導などの注釈をつけた。このような一連の研究成果をまとめ、FABA2 のプロトタイプを公開した。

Ⅲ . 研究成果と課題

上記研究成果は以下 2 つの学会において発表された。

【学会発表】

K. Hotta, A. Fukuzawa, K. Mitsuhara, K. Ikeo, T. Gojobori, K. Inaba and K.Oka
Three dimensional real-image embryo reconstructions for the ascidian *Ciona intestinalis*: II. from hatching larva to juvenile
Joint Meeting of the SFBD and the JSDB. "Frontiers in Developmental Biology
フランス , Giens peninsula, Hyeres（2008 年 9 月 13 ～ 17 日）

大久保玲子 , Delphine Dauga, Francois Robin, Patrick Lemaire, 堀田耕司 , 岡浩太郎
Quantitative analysis of morphogenetic change during gastrulation movement in ascidian *Ciona intestinalis* by constructing 3-D virtual embryo
3 次元バーチャル胚構築によるホヤ胚原腸陥入時における形態変化の 1 細胞レベルでの定量解析
日本遺伝学会第 80 回大会、ポスター発表
名古屋大学工学部 IB 電子情報館（2008 年 9 月 3 日 ~5 日）

【データベース公開】

FABA2:Four-dimensional Ascidian Body Atlas Ver.2 のプロトタイプを公開した。このデータベースは卵から孵化幼生までの三次元画像をデータベース化した FABA ver.1 につづく、孵化後の細胞の時空間的形態変化を明らかにした網羅的発生ステージ表である。これらのデータを使うことで、幼若体までホヤの発生を 1 細胞 / 組織レベルで追うことが可能になる。FABA および FABA2 を統合し上位データベースである CIPRO に組み込むことが今後の課題である。
公開日 2008 年 9 月 15 日、公開 URL:http://chordate.bpni.bio.keio.ac.jp/faba2/2.0/top.html

Ⅳ . 次年度への展望

2009 年度は三次元胚画像を用いた卵から幼若体までを網羅した FABA および FABA2 を統合し、上位データベースである CIPRO に組み込む。そして、CIPRO における全発生ステージに対応した三次元的タンパク質・遺伝子局在情報の視覚的な表示システムである 3DPL の開発を目指す。

【研究メンバー】

堀田耕司（理工）、金子洋之（文）、岡　浩太郎（理工）、松本　緑（理工）、鈴木　忠（医）

英語読解力強化のためのカリキュラム改革とテスト開発

研究代表者　中村優治　（文学部）

Ⅰ. 研究概要

本研究グループは、文学部の 1, 2 年生の英語教育を担当する専任教員 10 名から構成され、英語読解力の強化を中心としたカリキュラム開発とそれに準じた能力別クラス編成のためのテスト開発を目的とする。

国際社会のグローバル化の進展に伴い、世界的に活躍する人材育成の場としての大学教育の役割は一層高まりつつある。その一旦を担う英語教育の分野では、コミュニケーション能力や発信力の養成が重視されがちであるが、真の英語力の習得には、読む・聞く・書く・話すという英語 4 技能をバランスよく身に付けることが肝要である。しかしながら現状では、学生の学力低下に伴い、総合的な英語力の土台となる読解力の低下が著しい。その結果、教養課程のみならず専門課程においても、さまざまな教育上の弊害が生じている。このため大学教育の水準を維持する上でも、教養課程での英語教育改革への期待はきわめて大きい。

こうした背景のなか、文学部の英語教育担当者は、2005 年度より読解力向上を中心に据えた英語教育カリキュラムの改革を進めてきた。第一の目的は学生の読解力の強化であるが、大学卒業後に学生が実社会で求められるのは有用な英語運用能力を発揮することでもある。これに対応するためには、学生の能力と目的に応じた実際的なカリキュラム構成が必要となる。

Ⅱ. 2008 年度の活動報告

本研究グループでは、このカリキュラム実現に向けて、独自のプレイスメントテスト（以下 PT）の開発を進め、それに基づく能力別クラス編成による英語教育システムの検討を進めている。具体的には、1) 1-2 年生を対象とした英語読解測定のためのテストおよび評価法の開発、2) 1 年次及び 2 年次の英語読解力達成目標の設定、3) 目標達成を目指した 1-2 年次標準クラスのレベル設定、4) 標準クラスでは目標達成が困難な学生を対象とした補習クラスのレベル設定およびカリキュラム開発、5) 目標レベルに達している学生を対象とした上級クラス向けのカリキュラムの開発、6) PT の科学的検証、7) テスト項目銀行開発のための調査研究・問題作成・検討、といった取り組みを行っている。

2008 年度は月 1 回程度の会議のほか、年度末に集中して、以下のテスト作成手順に則りこれまでのプレイスメントテスト（第 1 回～第 4 回）に加えて、第 5 回～第 6 回分を作成し、実施し、分析を加えて保存している。

プレイスメントテスト作成方針・内容・作成手順

1. 文学部プレイスメントテストの目的
「読解力強化を中心とした能力別クラス編成のための情報収集を目的とした読解力の測定」
　a. 読解力に応じたクラス編成
　b. 目標達成が困難な学生への補習クラス編成
　c. すでに目標レベルにある学生への上級クラス編成
2. テスト作成目標 : 専攻課程（三田キャンパス）進級時の専門書　英語講読読解力
3. テストの構成・内容
　文法力（15 問）/ 語彙力（10 問）/ 総合理解力（クローズ形式　―― 10 問）　長文読解力（3 パッセージ各 5 問――計 15 問）
4. 採点方法
　マークシート・リーダーなどを用いた客観採点
5. 結果と考察
　テストの分析、受験者の分析、テスト項目の分析
6. 以上を繰り返しながらテスト項目銀行を構築する。
7. プレイスメントテストの採点結果
　総合得点、下位テスト分野の得点、総合順位が記載された　表を配布。

Ⅲ. 研究成果と課題

成果の主なものとして、2009 年 2 月に開催された 2009 英語読解力フォーラムにおける口頭研究発表、および 2008 年 11 月に開催された日吉リサーチポートフォリオ（HRP）におけるポスターセッションによる研究発表が挙げられる。フォーラムにおいてはグループメンバー全員が分担して、各レベルの文法力について詳細に分析したものを発表し議論を深めた。

Ⅳ. 次年度への展望

次年度には第 8 回目が実施されることになり、第 1 回から第 8 回までの PT 実施後には、全 400 項目を含んだテスト項目コーパスが出来上がる。これを活用することで、客観的な数値基準に基づき、文学部の学生の英語読解力を測定し、長期的なスパンでの読解力の変化を示すことを、成果のひとつとして視野に入れている。またこのテスト項目コーパスを英語教育関係者に公開することで、教員が授業で活用することも可能となるであろう。

またテスト作成、問題検討、テスト結果分析を共同作業で進めることにより、教員間で英語教育に関する活発な意見交換を行ったり、科学的な分析手法についてあらたな知見を得る機会にもなっている。本研究グループが主催するシンポジウムなどにおいて、文学部の英語教育方針や取り組み方、成果について、客観的なデータをもとに広く説明していくことによって、こうした一連の活動は、英語教員のみならず他の教員への FD へと結びつくことも考えられる。

【研究会メンバー】

アンドルー・アーマー（文）、中村優治（文）、宇沢美子（文）、ウィリアム・スネル（文）、足立健次（文）、坂本　光（文）、辺見葉子（文）、高橋宣也（文）、吉田恭子（文）、徳永聡子（文）

教養研究センター公開セミナー

◯書けない状況を克服するヒントとトリック
◯共生？それとも無知？　宇宙開発を例にしたSF文学・科学・技術の相互関係

企画責任者　石原あえか（商学部）

上記ふたつの講演会は、2008年5月8日に慶應義塾大学日吉キャンパス・新研究棟「来往舎」1階シンポジウム・スペースで開催された。講師のヘルガ・エッセルボルン＝クルムビーゲル博士およびハンス・エッセルボルン教授はいずれも本塾と学術交流協定を結んでいるドイツ・ケルン大学のライティングセンター所長と独語独文学科教授（＊当時。2008年秋よりポーランド・クラクフ大学訪問教授）。おふたりにはすでに2年半前の2005年秋に、日吉・教養研究センターにおいて各専門分野についてご講演いただいた（それぞれCLAアーカイブズVol.4, 5に収録済）。本講演会は、いずれもその続編と言えるが、夫妻の旅行日程の関係上、今回はやむをえず同日開催となった次第である。

2008年5月8日18時20分から、まずエッセルボルン＝クルムビーゲル博士が『書けない状況を克服するためのヒントとトリック（原題：*Tipps und Tricks gegen Schreibblockaden*）』について約30分講演された。前回は、彼女が所長を務めるケルン大学ライティングセンターの組織や設置コースの紹介が主題だったが、今回は「レポートや卒論の執筆を間近に控えた学生にどんな指導や習慣づけを行うべきか」という実践的内容を扱った。つまり主題は、インターネットの導入に伴って、レポートや論文の書き方も変化している現在、学生に安易な「コピペ（＝インターネット上の文章を無断でコピー＆ペーストすること）」を行わせることなく、いかに自力で書く技能を身につけさせるか、にあった。この文脈では大学生への情報モラル教育の必要性が説かれるのが常だが、女史は一貫して「自力で書く」ことの素晴らしさやその独創的行為を強調し、本技能の向上には日々の鍛錬が欠かせないが、ひとたび習得すれば生涯有効な能力となる、と締めくくったのが印象に残った。同時に作業計画立案方法、マインド・マップ使用法、締め切り前のストレス克服など具体的な対策例も豊富に挙げ、教員にも学生にもイメージしやすい内容だったため、続く質疑応答も活発であった。

短いコーヒー・ブレイクを挟み、19時15分頃から、続いてエッセルボルン教授が同様に約30分、『共生？それとも無知？――宇宙開発を例にしたSF文学・科学・技術の相互関係（原題：*Symbiose oder Ignoranz? Beziehungen zwischen Literatur, Wissenschaft und Technik am Beispiel der Erkundung des Weltraums*）』について講演された。前回のテーマは「ロボット」だったが、今回は両世界大戦間のロケット開発技術とドイツSF文学の相互関係を取り上げた。導入部では19世紀以来のさまざまな歴史的見解を紹介しつつ、特に1900年前後の（独作家ではFr. シュピールハーゲンやM. アイスに代表される）産業小説に続いて、J. ヴェルヌ、H.G. ウェルズ、K. ラスヴィッツらが、文学と科学あるいは技術の結びつきを前提とした新ジャンルのSFを成立させたことを確認した。本論に入り、1920年代に開始されたロケット開発と同時期のドイツにおける技術小説の稀有な《共生》時代について、作家とロケット理論家もしくは技術者を兼ねていたM. ヴァリエー、W. ライ、Hオーベルトなどの例を挙げつつ紹介した。歴史的背景として、ドイツ宇宙旅行協会（略称VfR、1927年設立）」や世界初の軍事用液体燃料ロケット「V2」との関連性に言及したことも興味深い。さらにエッセルボルン氏は、このドイツにおける科学と文学の密接な相互影響関係とは対照的に、20世紀のアメリカ合衆国では、スペース・オペラにおいて科学・技術に対する文学の《無知・無学》を露呈した冒険（戦闘）小説が発表されていることを指摘し、見掛けはSF風でもアイディアは西部劇に由来することをE.R. バロウズの『火星の大元帥カーター』三部作やE.E. スミスの『レンズマン』などを分析・提示した。結びではS. レムを引用しつつ、《共生》の可能性が高い文学ジャンル・SFについて検討した。参加者は、大学における「文学研究」には多種多様な可能性や方向性があること、そして独創性と広い視野が不可欠であることを改めて実感できたのではないかと思う。

なお両講演は、CLAアーカイブズVol.15に日独2カ国語表記で収録、2008年に刊行済みである。

最後に、両講演の開催にあたり今回もご協力を賜りました所長・横山千晶先生をはじめ、教養研究センターの皆様に心からお礼申し上げます。

極東証券寄附講座運営委員会

1. 基本方針

2008年の10月に、極東証券の寄附講座運営委員会の委員長を長く務められてきた武藤浩史先生（法学部）の後をうけて、委員長になりました鈴木晃仁（経済学部）です。これまで大きな成果を挙げている極東証券運営委員会の企画について、過去の実績の評価と問題点の反省、そして未来へのヴィジョンをめぐって、わたし個人が考えたこと、議論されたこと、決定されたことを以下に記します。

極東証券寄附講座委員会では、以下の三種類の活動を企画・運営している。①教養研究センター設置の授業「生命の教養学」に関連する活動。②同じくセンター設置の授業「アカデミック・スキルズ」関連の活動。③センターが開催している公開イヴェントである「サイエンス・カフェ」。この三つの活動は、それぞれ、学生に対する大教室での授業、学生に対する少人数のセミナー形式の授業、社会に広く大学の活動を公開することという、大学というものが持つ三つの主要な機能に対応している。

慶應義塾大学で、あるいは日吉キャンパスで、大人数授業、少人数授業、公開講座というそれぞれの機能を担っているのは、教養研究センターだけではない。それぞれの学部や各研究所などが、それぞれの機能を担った活動をしている。日吉キャンパス全体のそれぞれの活動に関して、重複はないか、過不足はないか、バランスは取れているかということを考え設計する権限はセンターにはないが、少なくとも全体像を見わたして、センターが企画するものについては、他の主体から提供されているものと重複しない、独自性があるものにすることを心がけることが必要である。

①「生命の教養学」は、2008年度については、生命科学を中心にした理系と文系の双方から多彩な講師をそろえて、多様な内容の授業を提供するというオムニバス形式が踏襲された。2008年度は「生き延びること―生死の後へ」というテーマを掲げて、塾内外から合計10名の講師が一回ずつ授業をするという形式が取られた。2009年度については、この形式を継続するべきかどうか、委員会で突っ込んだ話し合いが持たれた。集中講義の形で開催できないかという大胆な変革案まで議論された。最終的に、形式の点での変更は、一人の講師に複数回の講義をお願いする場合も含めることとなった。また、テーマは「ゆとりをめぐる問題」ということになった。

②「アカデミック・スキルズ」は、2008年度は基礎編（「アカデミック・スキルズI・II」）、中級編（「アカデミック・スキルズIII・IV」）が合計4クラス開講された。「アカスキ」という通称も定着し、慶應日吉の学生に愛されなじまれる「名物授業」になっている。学生と担当教員の熱気といい、その多彩で水準が高い成果といい、大学の少人数教育のこれからのあるべき姿の一つを確かに示している。講義を聴き、文献を読み、リサーチをし、論文を仕上げ、プレゼンテーションをするという一連の流れが、学生に明確な目的性を与えているのが効を奏しているのか。あるいは、教員が何人かいることが、教員と学生の間に緊張をもたらすのか。

③「サイエンス・カフェ」は、主に自然科学の教員が、自分の研究について面白いと思っていることを、子供からお年寄りまで広く一般の人に伝えようという企画である。これはある種の「公開講座」であるが、「カフェ」という名称どおり、肩が凝らない雰囲気でおしゃべりをする和気あいあいとした雰囲気の中で自然科学の研究に親しんでもらおうという企画である。2008年度には合計6回行われた。「サイエンス・カフェ」の個々の企画やその方針について、運営委員会が何らかの方針を立てることは、話題を提供する教員や講師の自由闊達な自発性を殺いでしまい、趣旨に外れたものになるであろう。一定の枠内で、自然科学系の教員が、その研究の面白さを伝えるのにもっとも適した形態で、企画運営する現在の形式が正解であろう。この企画も着実な成功をおさめている。

（鈴木晃仁）

プロジェクト――教育開発関連プロジェクト

アカデミック・スキルズ

2005年度よりこの名称で開講されている『アカデミック・スキルズ』は、大学において学ぶべきもっとも基本的なふたつのスキル、論文の書き方とプレゼンテーションの方法を少人数クラスで徹底的に指導することを目的としている。2008年度は、基礎編『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』(通年授業、春学期はⅠ、秋学期はⅡ)を3クラス、中級編『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ』(通年授業、春学期はⅢ、秋学期はⅣ)を1クラス開講した。以下、各クラスの目的および内容について詳述したい。

『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』の目的は、論文の書き方とプレゼンテーションの方法の基礎をじっくりと習得していく点にある。通常、春学期は論文の書き方の指導に専念し、秋学期からプレゼンテーションの指導を行うというスケジュールを設定しているが、それは各自の関心をアカデミックな場に発信するにあたって、論文作成の段階で鍛錬されるリサーチ能力や論理的な思考力が基本になるという認識に基づいている。月曜5時限クラス(担当:佐藤元状、津田眞弓、吉田恭子、履修者:Ⅰは18名、Ⅱは14名)と水曜5時限クラス(担当:礒崎敦仁、篠原俊吾、横山千晶、履修者:Ⅰは20名、Ⅱは19名)は、この伝統的なスケジュールにのっとって授業運営を行った。論文からプレゼンテーションへという流れの中で、ゆるやかなテーマ(月曜クラスは「私たちのアジア」、水曜クラスは「身近な知の世界を掘り下げる」)を掲げ、学生を知的に刺激し、各自の関心を引き出しながら、論文およびプレゼンテーションの作成へと誘った。木曜5時限クラス(担当:新井和広、佐藤望、徳永聡子、履修者:ⅠⅡともに15名)は、春学期からディベートを授業に取り入れ、論文からプレゼンテーションへという従来のスケジュールとは異なる、新しい授業形式を切り開いた。

水曜2時限の『アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ』(担当:佐藤元状、武藤浩史、横山千晶、履修者:Ⅲは7名、Ⅳは8名)は、原則として『アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ』の既習者を対象に、論文の書き方とプレゼンテーションの方法をさらに高度なレヴェルに高めるための指導を行った。2008年度は、「人文学的知を究める――知の在り方、文学の読み方、歴史の見方の徹底指導」という副題の下、幅広いジャンルの著作を検討し、学際的な知を養うとともに、テキストの精読の訓練を行い、独創的かつ先鋭的な論文の執筆に導いた。

合計4クラスから成る『アカデミック・スキルズ』の一年間の成果は、公開プレゼンテーション・コンペティション(2009年2月6日、来往舎シンポジウム・スペース)および『2008年度　アカデミック・スキルズ学生論文集』に結実した。コンペティションでは、塾内外から多くの聴衆を迎え、各クラスの代表、合計8名が口頭発表を行い、厳正な審査の結果、金賞3名、銀賞1名、銅賞2名、奨励賞2名が選ばれ、表彰された。また、論文部門では合計8名の代表者の中から、金賞2名、銀賞3名、銅賞1名、佳作2名が選ばれ、表彰された。学生が主体となって編集した『学生論文集』には、学生論文のほかに、授業の概要、講評、ブックガイドなどが含まれており、充実した内容となっている。

(佐藤元状)

生命の教養学

「生き延びること――生死の後へ」

コーディネーター：高桑和巳（理工学部准教授）、鈴木　忠（医学部専任講師）、吉田泰将（体育研究所准教授）

2008年度のテーマは「生き延びること」。一見すると、それは単に生きるということと区別できない。しかしそこには「ありえない苦境、死に瀕するまでの困難を超えて生きる」という強烈なニュアンスがある。死んでしまってもおかしくなかった、実際に仲間が多く死んでしまった、自分のなかの何かが死んでしまった――そのような状況を超えてさらに生き続けるというニュアンスである。英語でsurvival（超えた生）、ドイツ語でNachleben（後の生）と言われる「生き延び」には、文字どおり「通常想定される生死を超え、例外的にその後に延長される生」という含意がある。重病や犯罪から生還し、社会的弱者として生き延び、戦火をかいくぐる人々の具体的な生。医療的な技術と配慮によってなされる延命。苛酷な自然環境を巧みに耐え抜く生命――これら「生き延び」の諸相が詳細に検討された。また、文学作品や歴史を題材に「生き延び」の深層の探究が試みられた。これら多様な現象に対して哲学的検討が加えられて……。この一連の作業に立ち会って考えを深めた私たちは、「生き延び」について、また生き延びる「生命」自体について、新たな認識を獲得できたに違いない。

その内容の概略は、次の通り。

(1) 4月18日「寿命について考える」
高木由臣（奈良女子大学名誉教授）
・寿命という特定の生物現象について、徹底的に考えてみるという行為を通して、大学での学問ということに触れていく方法が示された（寿命の多様性・可変性・法則性・歴史性）。

(2) 4月25日「うつと過労自殺の医療人類学」
北中淳子（慶應義塾大学文学部准教授）
・映画「禁じられた遊び」の冒頭シーンを見て、強い衝撃を感じながら、テーマである医療人類学の対象領域の拡大、それが人々の死生観や人間観にどのような変化を齎すのか、人々の自己理解をどう変えていくのか、精神病の実際を交えて説明された。

(3) 5月2日「遺体科学の提唱」
遠藤秀紀（東京大学総合研究博物館キュラトリアルワーク研究系教授）
・さまざまな動物の遺体の映像、その剥製や標本の製作過程、日本の博物館と海外の有名博物館の比較、遺体から学ぶ多くの貴重な情報についてエネルギッシュに語られた。

(4) 5月9日「クリプトビオシス（隠された生命）」
鈴木　忠（慶應義塾大学医学部専任講師）
・乾いたコケの中にいる動物たち、中でも不思議な生命力を持つ「クマムシ」。クリプトビオシスという用語の意味、発見の歴史などを多くの映像と共に「死なないムシ?」を学んだ。

(5) 5月16日「貧困をいきのびるということ――労働・生命・自由」
杉田俊介（NPO法人療育ねっとわーく川崎職員）
・フリーターリブのために――労働・自由・生命――という詩。「自由と生存のメーデー」で、ある派遣社員が朗読したものを紹介、労働運動、生存運動、貧困の現在（多様化VS切り詰め）、支援者の論理と弱さという絆など、現代社会が抱えている構造の問題点が浮き彫りにされた。

(6) 5月23日「真剣勝負を生き抜いた武蔵の教え」
吉田泰将（慶應義塾大学体育研究所准教授）
・模擬刀を使って、受講学生と教員が「日本剣道形」七本を実演した。その真剣勝負に近い雰囲気を感じた後に、六十数度の勝負を勝抜き、生き抜いた宮本武蔵の教えについて、現代社会を生きるために役立つものを紹介した。

(7) 5月30日「死の哲学 / 生の政治学」
増田一夫（東京大学大学院総合文化研究科教授）
・「生き延びること」の意味論――単なる生を超える生、20世紀から21世紀へかけての核兵器をめぐる諸問題、ハンナ・アーレントやマルティン・ハイデガーの言葉から、いかに死ぬかではなく、いかに共に生きていくか（共生の技法）を追求すること、また、「全体主義」と「功利主義」についてもわかりやすく説明された。

(8) 6月6日「生き延びる文学」
武藤浩史（慶應義塾大学法学部教授）

サイエンス・カフェ

・「生き延びるアート ── ネガティブなのも芸の内」と題して、文学・芸術・映画・音楽の中にある「生きる」「生きない」が考案された。否定的なものを活用して、どのように生き延びるか？　ローリング・ストーンズやジョン・レノン、U2 のボノなどの楽曲、その詩の持つ否定性反復による快楽など、否定性を活用する様々なスキルを利用せよとの結論が導かれた。

(9) 6 月 13 日「エッジワークの社会学～人はなぜリスクを冒すのか」

根上　優（宮崎大学教育文化学部教授）

・エベレストでは標高 7800m を越えた地点を「デス・ゾーン」と呼ぶ。登る者が地獄の世界に迷い込んで、生きるか死ぬかの瀬戸際を歩き、そこからどう生還するか。なぜそうしてまで山に登るのか？　このような「自らリスクを冒す行動」をなぜ人間は求めるのか、多くの事例から考えることができた。

(10) 6 月 20 日「武の死生学」

前林清和（神戸学院大学人文学部教授）

・わが国の死生観の特徴は武にある。精神性の形成にあたっては、武士道が大きく影響している。武士は、武士道という倫理観に基づいて生き、武道を身につけていた。この二つは、共に死と隣り合わせの位置にあった。自分より「命」より大切なものを考えてみた。

(11) 6 月 27 日総括

高桑和巳（慶應義塾大学理工学部准教授）

・これまでの講義を振り返り、その要点を確認していった。次週の試験問題「これまでの授業で扱われた 1 つのテーマ、あるいはこれまでの授業から出発して自分で考えた1つのテーマを中心に据え、『生き延びる』ということについて自由に論じてください。なお、論述が単なる感想ではなく説得的な議論になるように注意すること。」を提示して締めくくった。

このように多方面でご活躍の講師の方々に対して、各回学生からの質問も多数、積極的に出て、盛り上がりを見たことを嬉しく思う。

（吉田泰将）

飲み物を片手に、気軽なスタイルでサイエンス談義に混じることのできるカフェ、日吉キャンパス来往舎の「サイエンス・カフェ」は、極東証券寄付講座「生命の教養学」の公開講座という位置づけで 2007 年初夏に開店してから、およそ 2 ヶ月に 1 度のペースで着実に開催されている。当初からこちらが期待した通り、子供のお客様もかなり多く、大学の講義などではなかなか見られないような大変活発な質疑応答がある。このカフェで話題提供をする話し手にとっては、子供にもわかるような話し方を工夫する良い機会ともなるし、また、思いもかけない質問を受ける貴重な体験の場となっている。相互に良い刺激を与えつつ、このカフェはこれからも続いていくことだろう。このカフェの活動によって、大学で行われている研究活動が少しでも社会に還元され、特に次代を担う若い伸びやかな頭脳にとって良い時間空間となることを期待している。「通りがかりにちょっと寄ってみたいカフェ」であることを目指し、第 10 回までは事前申し込み不要としていたが、準備の都合上、第 11 回からはなるべく事前の連絡をお願いすることにした。ただし定員は明示せず、当日参加もできる自由な雰囲気を残している。以下に 2008 年度に開催された第 6 ～ 11 回のタイトル、講師、ポスターの宣伝文、参加人数を列記する。

第 6 回　『若返り』の秘密と可能性をさぐる

2008 年 5 月 17 日　　高橋利幸（商学部・生物学）

「いつまでも若く美しく……」は、不老不死を求めた時の権力者の時代から続く永遠のテーマです。人間の体をつくる細胞は、分裂し、増えることができます。しかし、その分裂回数には限界があります。これが細胞の『老化』です。人間よりも下等な生物（ゾウリムシなど）の中には、老化した細胞から再び若い細胞へ戻る生物がいます。すなわち『若返り』です。時間を感じ、世代を超えてなお生きるこの生物を顕微鏡で観察しながら、『若返り』の秘密をさぐってみましょう。

参加人数：31 名

第 7 回　人間と宇宙のかかわり――ガリレオから 400 年――

2008 年 7 月 12 日　表　實（商学部・物理学）

ガリレオが初めて自作の望遠鏡で宇宙を眺め、幾つかの重要な発見をしたのは 1609 年のことである。

それから 400 年、宇宙観測の技術と宇宙からの情報を読み取る能力は飛躍的に進歩し、宇宙に関する知見も大きく進展した。ガリレオはこの他にも、落体の実験・振り子の等時性の発見など、科学的に貴重な数多くの貢献をしているが、その姿勢は終始「実験・観測重視」で一貫していた点が注目される。この 400 年間に得られた宇宙に関する知見の大きさとその重みを受け止めてみるために、我々もガリレオに倣って自分自身で観測し、得られたデータを基にして、宇宙の構造を調べるための幾つかの挑戦を試みてみよう。
参加人数：44 名

第 8 回　実演！回転物体の不思議な運動
2008 年 9 月 6 日　下村　裕（法学部・物理学）
回転する物体は不思議な運動をします。例えば、ゆで卵をテーブルに置いて充分早く回すと、卵は立ち上がりひとりでにジャンプします。あるいは、コインを傾けて回すと、聞こえる音はコインが倒れるにつれ高くなります。はたまた、右向きに回転させても、途中から左向きに逆回転する石があります。今回のサイエンス・カフェでは、回転する物体のそんな運動を 1 ダースほど実演し、簡単な物理を説明する予定です。皆さんも会場で回して不思議を実感してみましょう！
参加人数：42 名

第 9 回　あなたもファーブル！　昆虫と話そう
2008 年 11 月 22 日　上村佳孝（商学部・生物学）
ファーブル昆虫記が世に出て今年で 101 年。ファーブルが昆虫と「話をできた」からこそ、昆虫たちの多様な暮らしぶりが活き活きと伝わってくる。それが昆虫記の面白さだと思います。皆さんも身近な多様な隣人である昆虫たちと、実際に話をしてみませんか？当日はいくつかの昆虫を実際に観察していただく予定です！
参加人数：42 名

第 10 回　天気のお話――いろんな雲を作ってみよう！　2009 年 1 月 24 日　杉本憲彦（法学部・物理学）
なにげなく空をながめていると、そこに浮かんでいる雲。どうして浮かんでいられるのでしょう？　どうして形がそれぞれ違うのでしょう？　考えてみると不思議ですね。それでは実際にみんなで雲を作って、観察してみましょう！
参加人数：31 名

第 11 回　サンゴは謎のかたまりっ！
2009 年 3 月 21 日　服田昌之（お茶の水女子大学理学部生物学科）
サンゴという生き物は、知れば知るほどわけがわからなくなってきます。オス・メスの違いってなに？一斉産卵はなぜ起きる？光合成をする動物？個体ってなに？サンゴが島を作る？サンゴの謎についてみんなで考えてみましょう。
参加人数：53 名

（鈴木　忠）

教員のためのサポート

総括

近年、大学に対して教育の充実がこれまで以上に求められるようになってきた。情報技術の急速な発達や教育に関わる体制の変化に適応するために、教員が新たなスキルを習得することも求められるようになっている。さらに、教える対象である学生たちの気質や生活習慣も一昔前とは様変わりしたために、教員としてどのように対応すべきか頭を悩ませるような状況に遭遇することも少なくない。大学教育を取り巻く環境は激変の最中にある。われわれ大学教員は、それに冷静に対処し、必要とあらば新しい状況に柔軟に対応できるように、常日頃から準備をしておくことも必要となってきている。

慶應義塾には、このような新たな状況に対処するための知識や経験および設備が様々な部署、様々な人材の中に様々な形で蓄積されている。しかし、情報の共有が充分でないために、せっかくの財産が個々の教員たちに充分に生かされていないのが現状である。このような状況に鑑み、教養研究センターでは、「教員サポートワークショップ」を開催し、研究教育に資する様々な知識とスキルを紹介している。

本年度は、日吉メディアセンターとの共催で「メディアリテラシーワークショップ」を、学生相談室との共催で「学生を知ろう、学生相談室を知ろう」を開催した。以下、各プロジェクトの詳細について、企画・立案・実施に携わったプロジェクトメンバーから報告する。

メディアリテラシーワークショップ

近年、日吉の教員が従来とは性格の異なる授業を担当するケースが増えている。少人数の履修者にプレゼンテーションや論文執筆などを指導するリテラシー科目もその一つである。このような授業は、教員各自の工夫で学生からの確実な手応えを引き出すことができる反面、必ずしも自分の専門でない分野や普段手慣れていない研究方法を紹介したり指導したりしなければならないこともあり、困惑してしまうことも多いのが実情である。

このようなリテラシー教育においては、情報を収集するためにメディアセンターが提供する様々な資料やデータベース等のサービスを活用する方法を指導する必要があろう。一方、日吉メディアセンターで日ごろレファレンスカウンターに座り、学生の質問に対応している図書館員の方々は、情報収集・整理において日吉の学生が遭遇する種々の困難とその対処法についての豊かな知識をお持ちである。メディアセンターのサービスについて学び、図書館員の経験知を教わることは、よりよい授業を実現するために有益であろう。このような趣旨から、昨年度に引き続き、教養研究センターと日吉メディアセンターの共催によるメディアリテラシーワークショップ「メディアセンター・サービス活用術」が開催された。

6 月 18 日（水）には、ベーシック編として、「少人数セミナー授業での実践ワークショップ」が開催された。このワークショップでは、日頃、日吉の学生向けの情報リテラシーセミナーを担当している図書館員によって、メディアセンターの所蔵する資料と提供するサービスを活用して、問題発見 - 資料収集 - 問題考察 - レポート作成のプロセスを行わせるための、効果的な指導法が紹介された。上記のプロセスの中で学生が困難を感じている点を踏まえた上で、資料に確実に辿りつくための検索キーワードの立て方・様々な検索ツールの使用法・収集した資料の整理の仕方など、情報のプロならではの知識と経験から、実践的な指導方法が紹介された。あわせて、Kitty や Path などメディアセンターが提供するサービスを効果的に授業に取り入れる方法についても紹介があった。

6 月 23 日（月）には、ステップアップ編として「文献管理ソフト RefWorks 利用法」が開催されました。このワークショップでは、収集した文献情報を効率的に整理し研究・論文執筆に役立てるための文献管理ソフトとして、メディアセンターが推奨する RefWorks の使い方を学んだ。ベーシック編で学んだ、様々の学術的な情報を得るためのデータベースの活用法と RefWorks の充実した文献管理・活用機能とを組み合わせることで、教育のみならず研究においても、大きな効果が期待できることが実感された。あわせて、作成した文献リストを用いて学生の指導や授業に役立てる方法についても紹介があった。

日吉メディアセンターとの共催によるワークショップは、今後も継続的に開催される予定である。

（種村和史）

学生を知ろう　学生相談室を知ろう

活動の趣旨ならびに目的

近年、慶應義塾のみならず、他の教育機関においても、発達障害と思しき学生の数が確実に増加している。しかし、発達障害という概念自体、なお広く浸透しているとは言い難く、実際に教職員として現場に立っていても、外見上、気力や理解力が欠如しているかにみえるこのような学生とどう向き合うかは大きな問題である。また、発達障害者支援法の施行や特別支援教育の開始からしても、これをサポートすること自体がすでに大学に対する社会的要請となりつつあるように思われる。

こうした状況に鑑み、教養研究センターでは2008年1月、学生相談室カウンセラーの萩原先生をお招きして発達障害に関する総合的な講演会を開催した。2年目となる今年度は、萩原先生のご講演に加え、相談の具体例や問題点を紹介し、「現場」を広く知ってもらうことを目的に、アソシエイト・カウンセラーの佐藤さんにもお話しいただいた。詳細は以下の通りである。

独立館が完成し、新たな空間・新たな体制でのスタートが切られようとしているいま、こうした企画を通して学生相談室がより身近なものとなり、ひいてはそれが義塾全体の学生支援活動の一助となれば幸いである。

活動内容

講演会(1)　『学生相談室の活動と連携』
日時：2009年1月22日(木)　18:15-19:45
場所：日吉キャンパス来往舎1階　シンポジウムスペース
講師：佐藤曉美（慶應義塾大学　日吉学生相談室　アソシエイト・カウンセラー）
司会：鈴村直樹(経済学部教授)

まず、講師から学生相談室の活動内容・特色・利用状況、相談内容や相談件数の推移、また学生の話を聞くときのコツなど、相談全般に関わる具体的な講義があった。続いて質疑応答が行われ、相談室のイメージ、教員の能力と問題を抱える学生への対処法、学習指導と学生相談の関係などについて多くの質問が寄せられた。

講演会(2)　『発達障害を抱える学生への関わり方』
日時：2009年1月29日(木)　18:15-19:45
場所：日吉キャンパス来往舎1階　シンポジウムスペース
講師：萩原豪人（慶應義塾大学　学生相談室　カウンセラー）
司会：鈴村直樹(経済学部教授)

はじめに講師から発達障害に関する基本的な講義が行なわれた。具体的な内容は、a)発達障害とは何か、b)大学生に多くみられる発達障害はどのようなものか、c)学生が悩みを抱えるのはどのような場面か、d)大学で可能なサポートは何か、e)そうした学生にどう対応したらよいかなどである。続いて行われた質疑応答では、大学側の配慮・教員と相談室の連携などに関する多くの質問が寄せられ、議論はさらに立ち上げられたばかりの「障害学生支援委員会」のありかたにまで広がっていった。

（鈴村直樹）

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

日吉行事企画委員会（HAPP）

【プロジェクトの内容と目標】

日吉行事企画委員会（HAPP）は、春の新入生歓迎行事、秋の公募企画行事の二本柱によって、2008年度も運営した。あたかも健康な生命体のように、形式や運営方法はほぼ一定の形を保ちつつ、内容においては、年々新しいものを継続的に盛り込んでいる。新入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行っている。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画をHAPPが後援するものである。新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終えている。この際、様々な行事の主催者として、日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの二点に常に留意している。

【現在の目標達成度】

日吉行事企画委員会は、年3回、全体会議（6月、12月、1月）を行い、各企画内では、担当委員、事務局、責任者間で頻繁に打ち合わせを行っている。特に2008年度は、著作権、アンケート、個人情報の取扱いについて精力的に議論を行い、雛型を作った。

【2008年度春の新入生歓迎行事】

1.「星の王子の砂漠を歩く」山口佳巳写真展。『星の王子さま』の作者サン＝テグジュペリの足跡（サハラ砂漠）を写真で辿った写真展。5/17（土）～5/22（木）11:00～17:00（初日のみ13:00～17:00）。来往舎シンポジウムスペース。※日曜日も開催。
2.「室伏鴻舞踏公演quick silver／HIYOSHI version」。世界で活躍する舞踏家、室伏鴻が慶應義塾で初の公演。あわせて、仏映像作家バジル・ドガニスが来日、自身の映像を上映し室伏と語った。〔フィルム上映〕5/26（月）16：00～18：20。来往舎シンポジウムスペース。〔ダンスパフォーマンス〕5/26（月）19：00～19：50。来往舎イベントテラス。
3.「パーフォーマンス公演、妄人電鉄」。体感型総合エンターテイメント団体「妄人文明（わんにんぶんめい）」による公演。6/6（金）18:30～。来往舎イベントテラス。
4.「“熱狂の日”@日吉キャンパス――多文化・多民族共生の祝祭――」。民族音楽、ダンスなどフランス・ブルターニュ地方の文化を体験できる参加型イベント。6/14（土）。来往舎イベントテラス、シンポジウムスペース。
5. 演奏会シリーズ「古典を奏でる」。「古典」をテーマにした連続コンサート。第1回「温故知新の音楽――古今東西の歌から辿る音の旅」。チェンバロ：桒形亜樹子。6/16（月）18:15～。来往舎シンポジウムスペース。第2回講演会「ソクラテスの死」（第3回のプレレクチャー）。講演者：納富信留（慶應義塾大学文学部教授）。6/23（月）18:15～。来往舎シンポジウムスペース。第3回「甦る古典」。ソプラノ：坂本知亜紀、ピアノ：フィリップ・コミネッティ（慶應義塾大学商学部准教授）。6/30（月）18:15～。来往舎シンポジウムスペース。第4回「古典との出会い――慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会」。オーケストラ：慶應義塾コレギウム・ムジクム・オーケストラ、指揮：広沢麻美。7/9（水）16:45～。来往舎イベントテラス。
6.「環境週間」。パネルディスカッションや展示講演会などのイベントを開催し環境問題への関心を喚起する。6/23（月）～6/27（金）日吉キャンパス。

「星の王子の砂漠を歩く」山口佳巳写真展
（2008年5月20日、シンポジウムスペース）

「室伏鴻舞踏公演quick silver／HIYOSHI version」
（2008年5月26日、イベントテラス）

7. 特別企画 映画「幕間」(1924)：無声映画とピアノ・ライブのコラボレーション。映画「幕間」のピアノ伴奏つき上映と関連するテーマによる講演会。講演「『幕間』―― 1924年のアヴァンギャルドたち」笠井裕之(慶應義塾大学法学部准教授)。10/6(月)、18:15～19:15、来往舎イベントテラス。上映「幕間」(1924)。ピアノ演奏：フィリップ・コミネッティ(慶應義塾大学商学部准教授)。10/6(月)19:30～19:50。来往舎イベントテラス。
8. 特別企画「塾長と日吉の森を歩こう」。12/13(土)14:00～(13:45集合)90番教室。先着50名(2年生以上も参加可)で募集した。

【秋の公募企画行事】

1.「Diverta!! Extreme stage juggling show」(学生企画)。来往舎でのジャグリングを中心としたステージパフォーマンス。10/24(金)18:30～、10/25(土)14:00～来往舎イベントテラス。
2.「シェーンブルンの記憶 The recollection of Schönbrunn」(学生企画)。緊迫の歴史ミステリーを扱った演劇公演。10/30(木)、31(金)19:00～21:00、11/1(土)17:00～19:00。来往舎イベントテラス。
3.「空の回遊槽」迫田悠映像インスタレーション、音楽：勝井祐二――(学生企画)。インスタレーション展示：12/8(月)～12/11(木)17:00～19:00。来往舎イベントテラス。ライブ：12/12(金)18:30～。来往舎イベントテラス。
4.「異国見聞『八十日間世界一周』1872・グローバリゼーション元年、ヴェルヌの見た横濱」(教員企画)。ジュール・ヴェルヌ『80日間世界一周』に関する展示と演劇公演。展示：12/15(月)～12/20(土)。来往舎イベントテラス。おのまさしあたあ『80日間世界一周』公演：12/20(土)18:00～。来往舎シンポジウムスペース。

(小菅隼人)

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

日吉キャンパス公開講座運営委員会

日吉キャンパス公開講座は、慶應義塾大学日吉キャンパスを中心に、大学が持つ知的リソースを地域社会に公開し還元することを主たる目標としている。2008年度はまず春期公開講座として、参加型少人数セミナー「モノを創る」3講座各4回が開講された(詳細は後述)。これは講義形式で行われた2007年度公開講座「モノを創る」に続くもので、その講師陣から3名が集中的な演習形式の授業を行った。受講者は50-60歳代を中心に、18歳の塾外学生や塾生も加わり、多様な世代が参加することにより刺激的な講座となった。秋期公開講座では9月27日から12月6日までの土曜日、「記録・記憶と構想の現場」というテーマで計10日間20コマの講義が行われた(詳細は後述)。受講数は268名(うち通信教育課程生を含む塾生9名)、先行年度からのリピーターが多く、平均年齢58.1歳と従来同様にシニア層が中心である。ちなみに最年少は18歳、最高齢84歳であった。平均出席率は72%、修了者(6回以上出席者)数は214名(80%)と、熱心な受講者が多く見られた。春期・秋期共に、受講者の多くが退職者を中心としたシニア層であることが、高い出席率の維持、年度をまたいでの受講者の定着など、独立採算制をとる財務面も含め、講座運営の安定に大きく寄与していると考えられる。

2008年度 春期公開講座「モノを創る」

講座1 サティ ―― 音楽を超えて

開催日：5/9-30毎金曜
講師：フィリップ・コミネッティ(商学部准教授)
受講者数：6名

講座2 芸術の春、創作の喜び ―― 日本語文学(超)入門

開催日：5/10-31毎土曜
講師：佐藤元状(法学部専任講師)
受講者数：15(塾生5)名

講座3 物と技術と「総かり立て体制」―― ハイデッガー「ブレーメン連続講演」を読む

開催日：5/10-31毎土曜
講師：荒金直人(理工学部専任講師)
受講者数：9名

2008 年度 秋期公開講座「記録・記憶と構想の現場」

講座 1　9 月 27 日（土）開催

3 限　開講式／記録・記憶と構想の現場
講師：小潟昭夫（経済学部教授）

4 限　バリ島――祭祀とトランスの創造力を巡って
講師：石井達朗（理工学部教授）

講座 2　10 月 4 日（土）開催

3 限　不可能の記録：現代詩の翻訳現場
講師：吉田恭子（文学部助教）

4 限　ゲーテの仕事場――悲劇『ファウスト』ができるまで
講師：山本賀代（経済学部准教授）

講座 3　10 月 11 日（土）開催

3 限　身体（カラダ）は進化の記録集
講師：中島陽子（元慶應義塾大学文学部教授）

4 限　意識される『今』は幻想なのか？
――エピソード記憶を鍵に脳と心の謎を解く――
講師：前野隆司（大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授）

講座 4　10 月 18 日（土）開催

3 限　コミュニケーションの場づくりを構想する
――三田の家の場合――
講師：坂倉杏介（DMC 統合研究機構特別研究講師）
長田進（経済学部准教授）

4 限　都市の価値創造：『江戸－東京』の歴史を持たない臨海副都心に人は価値を創造できるのか
講師：助川たかね（映画専門大学院大学研究科長・教授）

講座 5　10 月 25 日（土）開催

3 ～ 4 限　記憶／記録としてのハリウッド映画
講師：大和田俊之（法学部准教授）

講座 6　11 月 1 日（土）開催

3 限　アメリカの奴隷取引と奴隷制の記録
講師：柳生智子（経済学部専任講師）

4 限　普遍史 vs 民族史――バロックから啓蒙へ
講師：伏見岳志（商学部准教授）

講座 7　11 月 15 日（土）開催

3 限　物理の構想現場――記録・記憶による仮説とその検証
講師：下村裕（法学部教授）

4 限　江戸の源氏物語――光君の記憶
講師：津田眞弓（経済学部准教授）

講座 8　11 月 22 日（土）開催

3 限　リアルの記録、バーチャルの記憶
講師：稲見昌彦（大学院メディアデザイン研究科教授）

4 限　E．サティと能――《時間》と《記憶》を登場させて
講師：フィリップ・コミネッティ（商学部准教授）

講座 9　11 月 29 日（土）開催

3 限　記憶の迷路――ウォン・カーウァイと島嶼の可能性
講師：佐藤元状（法学部専任講師）

4 限　写真の記憶／父の記憶
講師：瀬戸正人（写真家）

講座 10　12 月 6 日（土）開催

3 限　記憶と記録――写真について
講師：荒金直人（理工学部専任講師）

4 限　十九世紀フランス作家の源流を訪ねて
――言葉と映像と音楽の融合を目指して――
講師：小潟昭夫（経済学部教授）［代講：後平隆（経済学部教授）・横山千晶（教養研究センター所長）］

（坂本　光）

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究交流会の開催

1．趣旨

教養研究センターでは、展開している様々な活動の実態と成果を公開すると同時に、その活動を基に外部と意見交換を行いつつ、随時評価を受けるシステムを構築している。2008年度末は日本学術振興会・人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 「文学・芸術の社会的媒介機能」≪芸術とコミュニケーションに関する実践的研究≫グループ（大阪大学）との研究交流会を日吉キャンパスで行い、お互いの研究活動を披露し、意見交換を行うと同時に、身体ワークショップと横浜市のフィールドワークを行った。教養研究センターから紹介した主な事業は特定研究、及び基盤研究「身体知プロジェクト」の事業内容である。以下、詳細を述べる。

2．詳細およびスケジュール

開催日：2009年3月26日(木) -27日(金)

開催場所：慶應義塾大学日吉キャンパスおよび横浜市寿町コトラボ、横浜市BankART1929

主催：日本学術振興会・人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 「文学・芸術の社会的媒介機能」≪芸術とコミュニケーションに関する実践的研究≫ 慶應義塾大学教養研究センター

共催： 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）

スケジュール：

3月26日（木） 慶應義塾大学来往舎 （日吉キャンパス）

09:20 開会挨拶 （来往舎2階 中会議室）
横山千晶（よこやま・ちあき）慶應義塾大学教養研究センター所長・法学部教授
藤田治彦(ふじた・はるひこ)大阪大学CSCD教授・大学院文学研究科教授

09:30-11:30 「コミュニティ・アート」ワークショップとディスカッション （来往舎2階 中会議室）
永田 靖（ながた・やすし）大阪大学大学院文学研究科教授
正木喜勝（まさき・よしかつ）大阪大学大学院文学研究科助教

11:30-12:30 ＜昼食＞「ファカルティ・ラウンジ」

13:00-15:30 「ダンス」ワークショップ （来往舎2階 大会議室）
黒沢美香（くろさわ・みか）黒沢ダンス・スタジオ:「インストラクター」
武藤浩史（むとう・ひろし）慶應義塾大学法学部教授：「解説」

15:30-17:30 研究交流文科会（来往舎1階 101/102/103/104、およびシンポジウム・スペース）
慶應義塾大学教養研究センター特定研究、および基盤研究「身体知プロジェクト」メンバー
人文・社会科学振興プロジェクト『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究』メンバー

18:00-19:00 ＜夕食＞「ファカルティ・ラウンジ」

19:00-21:00 全体意見交換会（来往舎1階 シンポジウム・スペース）

3月27日（金）慶應義塾大学来往舎 （日吉キャンパス）

09:30-11:00 「環境と文学」ワークショップとディスカッション （来往舎2階 中会議室）
玉井 暲（たまい・あきら）大阪大学大学院文学研究科教授
上倉庸敬（かみくら・つねゆき）大阪大学大学院文学研究科教授
藤田治彦(ふじた・はるひこ)大阪大学CSCD教授・大学院文学研究科教授
渡辺浩司（わたなべ・ひろし）大阪大学大学院文学研究科助教

11:00-11:30 横浜「芸術と福祉」国際会議案内 （来往舎2階 中会議室）
横山千晶（よこやま・ちあき）

11:30-12:30 ＜昼食＞ 日吉「HOA HOA」

13:00-16:00 横浜「芸術と福祉」視察ツアー
寿町ホステル・ヴィレッジ
BankART 1929

16:00 BankART 1929にて解散

３．内容

2日間にわたって開催された今回の交流会には慶應義塾大学、大阪大学以外からも参加者があり（杉野服飾大学、青山大学）、非常に活発な意見交換が展開された。今回は大阪大学の研究者を中心とした「芸術とコミュニケーションの実践的研究」グループと慶應義塾大学教養研究センターが共通意識を持って取り組んでいる「コミュニティ・アート」、および新しい文学のあり方に関してそれぞれの取り組みと成果を発表しあい、よりよい理論構築と実践の場の提供をともに模索する場とした。また、単に机上の話し合いに終わらないためにも、教養研究センターの実践的な取り組み（言語知と身体知の融合）を肌で感じてもらうために、身体ワークショップを開催した。講師は、2007年度の「身体知プロジェクト」の一環である「新しい文学教育」の講師のお一人、黒沢美香氏である。

なお、今回の研究交流会のいまひとつの目的は、2009年度に教養研究センターが大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）の協力を得ながら進めていく新しいプロジェクトに関する話し合いの場を持つためでもある。すなわち、社会連携プロジェクト「芸術と社会」である。このプロジェクトでは「芸術」をひとつの入り口にしてコミュニティとかかわる教育的な視座と、コミュニティを活性化する実践の場を見出していくものであり、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）と慶應義塾大学教養研究センターがともに今まで目指してきた研究・教育テーマとも深く関わっている。今回の研究交流会ではこのプロジェクトの概要の紹介と意見交換、およびフィールド・ワークを行った。このプロジェクトの一環として開催されるのが、国際会議「芸術と福祉」（2009年8月17日～19日）であり、今回はその会場のひとつと参加者のためのフィールド・ワークの場所となる横浜市の関係区域を視察した。特に後者の寿町ホステル・ヴィレッジでは地元で社会活性化のためにさまざまな活動を展開している合同会社コトラボ代表者の岡部友彦氏より、寿の現状と町活性化の取り組みについて話を伺い、視察を行った。その後1929年に建てられた第一銀行を利用したイベントスペースBankART1929とその周辺を訪れた。ここは国際会議の会場のひとつとなる場所で、2009年4月よりヨコハマ・クリエイティブシティ・センターとしてさまざまな創造活動の拠点となることが全国的に期待されている。

このように、今後のさらなる交流と協力関係の強化を確認しあって研究交流会は無事に終了した。

（横山千晶）

教養研究センター

規程

制定　平成 14 年 7 月 2 日
改正　平成 17 年 6 月 3 日
　　平成 18 年 5 月 9 日
　　平成 20 年 4 月 1 日

（設置）
第 1 条　慶應義塾大学（以下「大学」という。）に，慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。）を置く。

（目的）
第 2 条　センターは，多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで，知の継承と発展に貢献することを目的とする。

（事業）
第 3 条　センターは，前条の目的を達成するために，次の事業を行う。
1　教養研究を中心とした知の継承と拡大，発展に資する研究活動
2　教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画，支援
3　教養研究活動への助成および支援
4　教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
5　その他センターの目的達成のために必要な事業

（組織）
第 4 条　①　センターに次の教職員を置く。
1　所長
2　副所長　若干名
3　所員　若干名
4　研究員　若干名
5　事務長
6　職員　若干名
②　所長は，センターを代表し，その業務を統括する。
③　副所長は，所長を補佐し，所長に事故あるときはその職務を代行する。
④　所員は，原則として兼担所員とし，センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。
⑤　研究員は，特別研究教員（有期），研究員（有期）または兼任研究員とし，所長の指示に従い研究に従事する。
⑥　国内および国外の大学，専門研究機関からの派遣研究者に関しては，別に訪問研究者を置くことができる。
⑦　事務長は，センターの事務を統括する。
⑧　職員は，事務長の指示により必要な職務を行う。

（運営委員会）
第 5 条　①　センターに運営委員会を置く。
②　運営委員会は，次の者をもって構成する。
1　所長
2　副所長
3　事務長
4　大学各学部長
5　大学各学部日吉主任
6　日吉研究室運営委員長
7　日吉メディアセンター所長
8　日吉 ITC 所長
9　体育研究所長
10　外国語教育研究センター所長
11　日吉キャンパス事務長
12　その他所長が必要と認めた者
③　委員の任期は，役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は 2 年とし，重任を妨げない。ただし，任期の途中で退任した場合，後任者の任期は前任者の残任期間とする。
④　運営委員会は所長が招集し，その議長となる。
⑤　運営委員会は，次の事項を審議する。
1　センター運営の基本方針に関する事項
2　センターの事業計画に関する事項
3　研究プログラムに関する事項
4　人事に関する事項
5　予算・決算に関する事項
6　コーディネート・オフィスに関する事項
7　その他必要と認める事項

（コーディネート・オフィス）
第 6 条　①　センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために，運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。
②　コーディネート・オフィスは，所長，副所長，事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは，所長，副所長，事務長

とともに , センターの事業を推進する。
③　コーディネート･オフィスは , 必要に応じて委員会を置き , センターの事業活動の一部を付託することができる。

(特別委員会)
第 7 条　運営委員会は , 必要に応じて特別委員会を置き , 第 5 条第 5 項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)
第 8 条　①　センターの教職員等の任免は , 次の各号による。
1　所長は , 大学評議会の議を経て塾長が任命する。
2　副所長 , 所員および兼任研究員は , 所長の推薦に基づき , 運営委員会の議を経て塾長が任命する。
3　特別研究教員 (有期) および研究員 (有期) については ,「任免規程 (就) (昭和 27 年 3 月 31 日制定)」の定めるところによる。
4　訪問研究者については ,「訪問学者に対する職位規程 (昭和 51 年 8 月 27 日制定)」の定めるところによる。
5　事務長および職員については ,「任免規程 (就) (昭和 27 年 3 月 31 日制定)」の定めるところによる。
6　コーディネーターは , 所員および義塾職員の中から , 所長が推薦し , 運営委員会が委嘱する。
②　所長 , 副所長およびコーディネーターの任期は 2 年とし , 重任を妨げない。ただし , 任期の途中で退任した場合 , 後任者の任期は前任者の残任期間とする。
③　所員の任期は 2 年とし , 重任は妨げない。
④　兼任研究員の任期は , 次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)
第 9 条　①　センターに次の研究プログラムを置く。
1　基盤研究 : 専任教員が核となって展開する , 教養研究を中心とした共同研究
2　一般研究 : センターが必要と認めた個人研究または共同研究
3　特定研究 : センターが企画 , 立案した研究
第 10 条　①　外部機関等との契約は , 慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。
②　学内機関等との契約は , 運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)
第 11 条　①　センターの経理は ,「慶應義塾経理規程 (昭和 46 年 2 月 15 日制定)」の定めるところによる。
②　センターの経費は , 義塾の経費 , 委託研究資金 , 国または地方公共団体等からの補助金 , 寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。
③　外部資金の取扱い等については , 研究支援センターの定めるところによる。

(規程の改廃)
第 12 条　この規程の改廃は , 運営委員会の審議に基づき , 大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附　則
①　この規程は , 平成 14 年 7 月 1 日から施行する。
②　この規程は , 施行後 3 年を目途に見直すものとする。
附　則 (平成 17 年 6 月 3 日)
この規程は , 平成 17 年 6 月 3 日から施行する。
附　則 (平成 18 年 5 月 9 日)
この規程は , 平成 18 年 5 月 9 日から施行し , 平成 18 年 5 月 1 日から適用する。
附　則 (平成 20 年 5 月 1 日)
この規程は , 平成 20 年 4 月 1 日から施行する。
附　則 (平成 20 年 11 月 4 日)
この規程は , 平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

教養研究センター

運営委員会委員（敬称略）

2007年10月1日～2009年9月30日
第4期（2008年度在籍者）

教養研究センター担当常任理事
西村　太良
教養研究センター所長　横山　千晶
教養研究センター副所長
鈴木　　忠（2008年9月まで）
萩原　眞一（2008年9月まで）
佐藤　　望（2008年9月まで）
不破　有理（2008年10月から）
武藤　浩史（2008年10月から）
種村　和史（2008年10月から）

教養研究センター事務長
吉川　智江（2008年5月まで）
松本　実（2008年6月から）
文学部長　長谷山　彰
経済学部長　塩澤　修平
法学部長　国分　良成
商学部長　清家　　篤
医学部長　末松　　誠
理工学長　真壁　利明
総合政策学部長　阿川　尚之
環境情報学部長　徳田　英幸
看護医療学部部長　山下　香枝子
薬学部長　笠原　忠（2008年4月から）
文学部日吉主任　関根　　謙
経済学部 日吉主任　羽田　　功
法学部日吉主任　朝吹　亮二
商学部日吉主任　渡部　睦夫
医学部日吉主任　古野　泰二
理工学部 日吉主任　大谷　弘道
薬学部日吉主任　竹田　忠紘
（2008年4月から2009年3月まで）
日吉研究室運営委員会委員長
小潟　昭夫
（2008年4月から10月14日まで）
木俣　章
（2008年10月15日から2009年3月まで）
基盤研究座長（慶應義塾大学の教育カリキュラム研究）
伊藤　行雄
基盤研究座長（身体知プロジェクト）
横山　千晶
日吉行事企画委員会委員長
小菅　隼人
極東証券寄附講座運営委員会委員長
武藤　浩史（2008年9月まで）
鈴木　晃仁（2008年10月から）
日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長
小潟　昭夫（2008年9月まで）
坂本　　光（2008年10月から）
日吉メディアセンター所長
伊藤　行雄
日吉ITC所長　中山　　純
日吉キャンパス事務長　彦久保　勝良（2008年11月まで）
安田　　博（2008年12月から）
体育研究所所長　植田　史生
外国語教育研究センター所長
境　　一三
日吉学事センター 部長　富山　優一
日吉メディアセンター事務長
風間　茂彦
日吉事務運営サービス課長
酒井　秀明

教養研究センター
コーディネート・オフィス（敬称略）

研究企画ボード
責任者 : 横山千晶（所長・法）
コーディネーター : 鈴木　忠（医、2008.9.30 まで）、不破有理（経、2008.10.1 から）、佐藤　望（商）、萩原眞一（理工）、武藤浩史（法）、種村和史（商）、鈴木晃仁（経、2008.10.1 から）坂本　光（文）、伊藤行雄（経）、小潟昭夫（経、2008.9.30 まで）、長田　進（経）、境　一三（経）、羽田　功（経）、朝吹亮二（法）、佐藤元状（法、2009.3.31 まで）、小菅隼人（理工）、彦久保勝良（キャンパス事務長、2008.11.30 まで）、安田博（キャンパス事務長、2008.12.1 から）、吉川智江（教養研究セ、2008.5.30 まで）、松本　実（教養研究セ、2008.6.1 から）

広報・発信担当
責任者 : 佐藤　望（副所長、2008.9.30 まで）、不破有理（副所長、2008.10.1 から）

日吉行事企画委員会（HAPP）
委員長 : 小菅隼人（理工）
委員 : 坂本　光（文）、石井　明（経）、小潟昭夫（経、2008.10 月まで）、羽田　功（経）、下村　裕（法）、佐藤　望（商）、竹内美佳子（商）、森吉直子（商）、小宮繁（理工）、森　泉（理工、2008.10 月から）、石手靖（体研）、河邊博史（保セ）、彦久保勝良（キャンパス事務長、2008.11.30 まで）、安田　博（キャンパス事務長、2008.12.1 から）、酒井秀明（運営サ）、土田平和（運営サ）、塚本いづみ（運営サ）、湯川哲史（学事セ）、宮崎俊明（学総セ）、上野美代子（学総セ、2008.5.31 まで）、山崎健二（学総セ、2008.6.1 から）、風間茂彦（日吉メディアセ）、遠藤恭子（日吉メディアセ）、日水邦昭（教養研究セ）、三橋　紫（外国語教育研究セ、2008.9.25 まで）、岩渕重夫（外国語教育研究セ、2008.9.26 から）

極東証券寄附講座運営委員会
委員長 : 武藤浩史（法、2008.9.30 まで）、鈴木晃仁（経、2008.10.1 から）
委員 : 宇沢美子（文）、鈴木晃仁（経、2008.9.30 まで）、小瀬村誠治（法、2008.10.1 から）、足立典子（商）、鈴木　忠（医）、高桑和巳（理工）、吉田泰将（体研）、吉川智江（教養研究セ、2008.5.31 まで）、松本　実（教養研究セ、2008.6.1 から）、奥田詠二（大学出版会）

日吉キャンパス公開講座運営委員会
（2008.9.30 まで）
委員長 : 小潟昭夫（経）
委員 : 伊藤行雄（経）、村越貴代美（経）、山本賀代（経）、大和田俊之（法）、佐藤元状（法、）、下村　裕（法）、Cominetti, Philippe（商）、福澤利彦（商）、荒金直人（理工）、小磯勝人（大学出版会）
（2008.10.1 から）
委員長 : 坂本　光（文）
委員 : 新島　進（経）、山本賀代（経）、下村　裕（法）、大出　敦（法）、上村佳孝（商）、Cominetti, Philippe（商）、中沢英夫（医）、荒金直人（理工）、前野隆司（システムデザイン・マネジメント研究科）、佐々木玲子（体研）、木下優佳（大学出版会）

教養研究センター事務局
吉川智江（事務長、2008.5.30 まで）、松本　実（事務長、2008.6.1 から）、宮坂敦子（2008.5.31 まで）、日水邦昭（2008.6.1 から）、甲賀崇司

教養研究センター

所員・研究員（敬称略）

○教養研究センター所長・副所長・事務長

任期：2006 年 10 月 1 日 ~2008 年 9 月 30 日
所長 : 横山千晶（法学部教授）
副所長 : 佐藤　望（商学部教授）、鈴木　忠（医学部専任講師）、萩原眞一（理工学部教授）
事務長 : 吉川智江（~2008 年 5 月 31 日）、松本　実（2008 年 6 月 1 日 ~）

任期 :2008 年 10 月 1 日 ~2010 年 9 月 30 日
所長 : 横山千晶（法学部教授）
副所長 : 不破有理（経済学部教授）、武藤浩史（法学部教授）、種村和史（商学部教授）
事務長 : 松本　実

○教養研究センター所員

専任教員　166 名
任期 :2007 年 4 月 1 日 ~2009 年 3 月 31 日

文学部 : 足立健次（准教授）、安藤寿康（教授）、大場茂（教授）、岡原正幸（准教授）、片木智年（教授）、金子洋之（教授）、倉田敬子（教授）、斎藤太郎（教授）、坂上貴之（教授）、坂田幸子（教授）、坂本　光（准教授）、関根　謙（教授）、高橋宣也（准教授）、高山博（教授）、徳永聡子（助教）、中村優治（教授）、西村太良（教授）、納富信留（教授）、長谷山　彰（教授）、辺見葉子（准教授）、増田直衛（教授）、八木章好（教授）、吉田恭子（助教）

経済学部 : 青木健一郎（教授）、厚地　淳（教授）、池田　薫（教授）、石井　明（准教授）、石井康史（准教授）、伊藤行雄（教授）、Ainge, Michael W.（准教授）、小潟昭夫（教授）、長田　進（准教授）、柏崎千佳子（准教授）、桂田昌紀（教授）、Gaboriaud, Marie（教授）、岸　由二（教授）、工藤多香子（准教授）、Knaup, Hans Joachim（教授）、後平　隆（教授）、近藤光雄（教授）、境　一三（教授）、佐々木由美（准教授）、志村明彦（准教授）、杉浦章介（教授）、杉岡洋子（教授）、鈴木晃仁（教授）、鈴木五郎（教授）、鈴木亮子（准教授）、鈴村直樹（教授）、竹内良雄（教授）、武山政直（教授）、千田大介（准教授）、土屋博政（教授）、永井容子（准教授）、長沖暁子（准教授）、長堀祐造（教授）、中山　純（教授）、西尾　修（教授）、西岡久美子（教授）、根岸宗一郎（准教授）、Notter, David M.（准教授）、羽田　功（教授）、Batty, Roger M.（教授）、光　道隆（教授）、福山欣司（准教授）、不破有理（教授）、星浩司（教授）、Ballhatchet, Helen J.（教授）、松岡和美（教授）、松原彰子（教授）、宮崎直哉（教授）、村越貴代美（教授）、八嶋由香利（准教授）

法学部 : 秋山豊子（教授）、朝吹亮二（教授）、礒崎敦仁（専任講師）、岩谷十郎（教授）、鵜崎明彦（教授）、太田昭子（教授）、大出　敦（専任講師）、大和田俊之（准教授）、小野裕剛（専任講師）、木俣　章（専任講師）、久我俊二（教授）、小瀬村誠治（教授）、小林宏充（准教授）、迫村純男（教授）、志村　正（専任講師）、下村　裕（教授）、Schart,Michael（准教授）、鈴木恒男（教授）、鈴木　透（教授）、辻　幸夫（教授）、常山菜穂子（教授）、本谷裕子（専任講師）、武藤浩史（教授）、安田　淳（教授）、横山千晶（教授）、Raeside, James M .（教授）

商学部 : 浅川順子（教授）、朝比奈　緑（教授）、牛島利明（教授）、小宮英敏（教授）、佐藤　望（教授）、識名章喜（教授）、白旗　優（准教授）、田上竜也（准教授）、竹内美佳子（准教授）、種村和史（教授）、橋本順一（教授）、長谷川由利子（准教授）、英　知明（教授）、福澤利彦（教授）、伏見岳志（准教授）、森吉直子（准教授）、安田公美（准教授）、横山和加子（教授）

医学部 : 大石　毅（助教）、小町谷尚子（准教授）、鈴木伸一（専任講師）、鈴木　忠（専任講師）、鈴木由紀（専任講師）、中澤英夫（助教）、三井隆久（准教授）

理工学部 : 石井達朗（教授）、岩波敦子（教授）、大谷弘道（教授）、岡　浩太郎（教授）、小原京子（准教授）、亀谷幸生（准教授）、熊倉敬聡（教授）、小菅隼人（教授）、小宮　繁（専任講師）、近藤幸夫（准教授）、斎藤博昭（准教授）、坂川博宣（助教）、田中孝明（助教）、田村要造（准教授）、仲田　均（教授）、萩原眞一（教授）、広本勝也（教授）、北條彰宏（准教授）、堀田耕司（助教）、前島　信（教授）、前田吉昭（教授）、松本緑（准教授）、森　泉（准教授）、森吉仁志（准教授）、横山由広（准教授）

総合政策学部 : 加茂具樹（准教授）

環境情報学部 : 石崎　俊（教授）

保健管理センター : 大野　裕（教授）、河辺博史（教授）、西村由貴（専任講師）、広瀬　寛（准教授）

体育研究所 : 石手　靖（准教授）、加藤大仁（准教授）、近藤明彦（教授）、野口和行（専任講師）、松田雅之（准教授）、村松　憲（専任講師）、村山光義（准教授）、吉田泰将（准教授）

高等学校 : 大西　章（教諭）

普通部 : 今井英喜（教諭）、太田　弘（教諭）

専任教員　2 名
任期 :2007 年 7 月 1 日 ~2009 年 3 月 31 日

法学部 : 篠原俊吾（教授）、新谷　崇（専任講師）

専任教員　1 名
任期 :2007 年 8 月 1 日 ~2009 年 3 月 31 日

文学部 : 北中淳子（准教授）

専任教員　6 名
任期 :2008 年 4 月 1 日 ~2009 年 3 月 31 日

文学部 : 上田修一（教授）

法学部 : 浅野眞希（助教）、四宮　愛（助教）、Henck,Nicholas J.（訪問准教授）

総合政策学部 : 太田達也（准教授）

外国語教育研究センター : 倉舘健一（専任講師）

専任教員　39 名
任期 :2008 年 4 月 1 日 ~2010 年 3 月 31 日

法科大学院 : 六車　明（教授）

文学部 :Armour, Andrew J. L.（教授）、井上逸兵（教授）、宇沢美子（教授）、Snell, William Joseph（教授）

経済学部 : 新井拓児（准教授）、伊藤幹夫（准教授）、大平　哲（准教授）、小木曽啓示（教授）、津田眞弓（准教授）、戸瀬信之（教授）、中野泰志（教授）、林田愛（専任講師）
法学部 : 佐藤元状（専任講師）、Narahashi-Henry, Nathalie（准教授）、宮下理恵子（准教授）

商学部 : 足立典子（准教授）、新井和広（専任講師）、石原あえか（教授）、Cominetti, Philippe（准教授）、深谷太香子（専任講師）、渡部睦夫（教授）

理工学部 : 荒金直人（専任講師）、石井一平（准教授）、石川史郎（准教授）、太田克弘（教授）、小田芳彰（専任講師）、栗原将人（教授）、高桑和巳（准教授）、高山正宏（助教）、高山　緑（准教授）、谷　温之（教授）、田村明久（教授）、宮崎琢也（准教授）

日本語・日本文化教育センター : 手塚千鶴子（教授）

志木高等学校 : 速水淳子（教諭）

湘南藤沢中等部･高等部 : 中平仁孝（教諭）

普通部 : 鈴木淑博（教諭）

幼稚舎 : 鈴木秀樹（教諭）

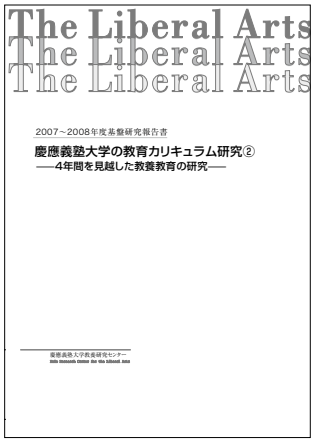
2008年度の主な活動記録

Date		Contents
4		極東証券寄附講座　「生命の教養学」「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅲ」開講　(春学期)
	26日	学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究プロジェクト　研究成果報告会」
5	8日	公開セミナー「○書けない状況を克服するヒントとトリック / ○共生？　それとも無知？——宇宙開発を例にしたSF文学・科学・技術の相互関係」
	9日	日吉キャンパス春期公開講座「モノを創る」(5月30日まで全4回)
	17日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ「サイエンス・カフェ6　『若返り』の秘密と可能性をさぐる」
	17日・18日	極東証券寄附講座「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」合宿
	17日~22日	HAPP入学歓迎行事　「星の王子の砂漠を歩く」　山口佳巳写真展
	18日	未来先導基金報告会
	26日	基盤研究 カリキュラム研究 研究会(副専攻制度に関連して ― 海外事例を中心に)
	26日	HAPP入学歓迎行事　室伏鴻舞踏公演　quick silver / HIYOSHI version
6	6日	HAPP入学歓迎行事　公演「妄人電鉄」
	14日	HAPP入学歓迎行事　" 熱狂の日 "@日吉キャンパス―多文化・多民族共生の祝祭――
	16日·23日·30日	HAPP入学歓迎行事　演奏会シリーズ「古典を奏でる」
	18日	< 教員サポート・ワークショップ > メディアリテラシーワークショップ ベーシック編「少人数セミナー授業での実践ワークショップ」
	23日	< 教員サポート・ワークショップ > メディアリテラシーワークショップ ステップアップ編「文献管理ソフトRefWorks利用法」
	23日~27日	HAPP入学歓迎行事　環境週間
	27日	オックスフォード大学　コーパス・クリスティ・カレッジ聖歌隊～イングランド合唱音楽の調べ～
	28日	基盤研究 カリキュラム研究 研究会(早稲田大学およびSFCでのセメスター制について)
7	11日	極東証券寄附講座運営委員会
	10日	未来先導基金採択プログラム「声」プロジェクト　第1回「能」の授業(志木高)
	12日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ「サイエンス・カフェ7　人間と宇宙のかかわり」
	19日	基盤研究 カリキュラム研究 合宿研究会
	30日	鶴岡セミナー・プレ企画「映画『蟬しぐれ』上映会と宇生雅明氏講演会」
	6~13日	身体知プロジェクト・未来先導基金採択プログラム「声」プロジェクト　「新しい文学教育の実験授業　その2」
8	19日	韓国・慶北大学校基礎教育院来訪
	31日~9月3日	鶴岡セミナー「鶴岡に学ぶ『生命』——心と体と頭と——」
9		極東証券寄附講座　「アカデミック・スキルズⅡ・Ⅳ」開講(秋学期)
	6日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ「サイエンス・カフェ8　実演！　回転物体の不思議な運動」
	11日	未来先導基金採択プログラム「声」プロジェクト　第2回「能」の授業(志木高)
	27日	日吉キャンパス秋期公開講座「記録・記憶と構想の現場」(12月12日まで全8回)
	29日	教養研究センター運営委員会
10	3日	実験授業「現代の危機——宗教と民族問題」(12月12日まで全8回)
	12日	HAPP特別企画　映画「幕間」(1924)：無声映画とピアノ・ライブのコラボレーション
	24日	HAPP公募企画行事　Diverta!! Extreme stage juggling show (学生企画)

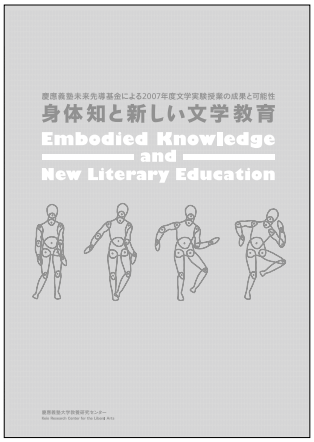
Date		Contents
10	28 日	基盤研究　身体知プロジェクト実験授業「体をひらく、心をひらく――ボクってどこにいるの ?」(12 月 9 日まで全 6 回)
	30 日 ~11 月 1 日	HAPP 公募企画行事　シェーンブルンの記憶 The recollection of Schönbrunn（学生企画）
	31 日	基盤研究　カリキュラム研究　研究会全体会議
11	14 日	Hiyoshi Research Portfolio 2008 出展
	15 日	鶴岡セミナー活動報告会
	22 日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ 「サイエンス・カフェ 9　あなたもファーブル！　昆虫と話そう」
	26 日	日吉キャンパス公開講座運営委員会
	27 日	プレ「学びの場プロジェクト」『学習相談アワー』(12 月 18 日まで全 4 回)
12	8 日	基盤研究　カリキュラム研究　研究会(成績評価問題とセメスター問題)
	8 日 ~12 日	HAPP 公募企画行事　空の回遊槽――迫田悠「映像インスタレーション」音楽 : 勝井祐二―（学生企画）
	13 日	HAPP 特別企画　「塾長と日吉の森を歩こう」
	15 日	基盤研究　カリキュラム研究　研究会(副専攻問題とフィッシュ問題)
	15 日 ~20 日	HAPP 公募企画行事　異国見聞『八十日間世界一周』　1872・グローバリゼーション元年、ヴェルヌの見た横濱　（教員企画）
	18 日、19 日	基盤研究　身体知プロジェクト　英語ドラマ公演「California Suite」
	18 日 ~20 日	未来先導基金採択プログラム「三田の家」　大学地域連携シンポジウム
1	7 日	未来先導基金採択プログラム「声」プロジェクト　慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会
	12 日	未来先導基金採択プログラム「三田の家」　三鷹天命反転住宅ワークショップ
	20 日	基盤研究　身体知プロジェクト実験授業「体をひらく、心をひらく――ボクってどこにいるの ?」ふりかえり会
	22 日	< 教員サポート・ワークショップ > 学生を知ろう 学生相談室を知ろう 1 「学生相談室の活動と連携」
	24 日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ 「サイエンス・カフェ 10　天気のお話――いろんな雲を作ってみよう !」
	29 日	< 教員サポート・ワークショップ > 学生を知ろう 学生相談室を知ろう 2 「発達障害を抱える学生への関わり方」
	30 日	特定研究全体会議
2	6 日	アカデミック・スキルズ「プレゼンテーション・コンペティション」
3	5 日	教養研究センター運営委員会
	21 日	極東証券寄附講座「生命の教養学」一般公開ゼミ 「サイエンス・カフェ 11　サンゴは謎のかたまりっ !」
	26 日、27 日	「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究交流会

教養研究センター

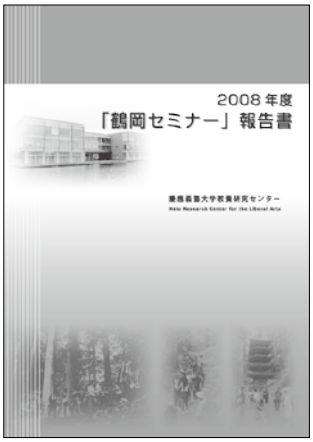
刊行物抜粋



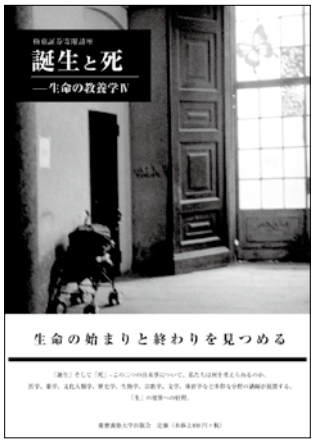
2007 ～ 2008 年度基盤研究報告書
（2009.3.31 発行）



慶應義塾未来先導基金による 2007 年度文学実験授業の成果と可能性
（2009.3.30 発行）



2008 年度鶴岡セミナー報告書
（2009.2.10 発行）



2007 年度極東証券寄附講座「生命の教養学」講義集
（2008.9.10 発行）

Newsletter13 号
（2009.1.15 発行）

Report 教員サポート 3
（2008.3.31 発行）

CLA アーカイブズ 9
（2007.3.30 発行）

CLA アーカイブズ 12
（2008.3.31 発行）

CLA アーカイブズ 15
（2008.9.30 発行）

終わりに

2008年度の活動を振り返って

教養研究センター事務長　松本　実

活動報告書は、私のような新参の部内者にとっても、センターの全体像を掴む上で嬉しい存在となります。通読の甲斐あってか、着任当初は混沌の様相を呈した諸活動に有機的な連繋があることが漸く見えてきたこの頃です。しかし、ボランティア精神横溢な方々の集合体とはいえ、この体制と予算でどうして盛り沢山の活動をこなしていけるのか、という驚きが依然存在することも偽らざる感想です。

さて、2008年度はセンター規程改正後の新たな運営形態が始動し、人事面でも事務局の異動、続いて副所長全員の交代があるなど、変動の年でした。規程の改正では、コーディネート・オフィスやコーディネーターの位置付け、役割、機能などが明確になり、これで今後の事業展開を支える磐石な基盤が用意されたと解釈しています。6月の職員人事では、事務長と担当者に交代があり、事務長に松本、業務を日水、甲賀、御旅屋が分掌することとなりました。教員人事では、9月の運営委員会を経て、重任の横山所長のもと、不破、武藤、種村副所長を中核とするコーディネート・オフィスがスタートしました。また、日吉行事企画委員会では小菅委員長、極東証券寄附講座運営委員会では鈴木(晃仁)委員長、日吉キャンパス公開講座運営委員会では坂本委員長が就任し、委員の皆様とともに諸企画の遂行にご尽力いただきました。

学生参加の夏期「鶴岡セミナー」は、初の試みゆえに、関係者、現地との連絡・調整に大わらわの状態が続きましたが、成功裏に終了し得たのは東北公益文科大学、協賛・協力団体各位、TTCKなど学内外関係者のご理解とご支援の賜物と感謝しています。11月開催の成果報告会では、両校学生の見事なコラボレーションに感動しました。セミナーに係る一連の行事をこなすと相当な業務量となりますが、この感動に優るものはなく、直ちに次回開催の検討に入った次第です。

基盤研究では、カリキュラム研究と身体知プロジェクトに係る先生方の旺盛な研究活動がありました。カリキュラム研究会、身体知実験授業、未来先導基金支援による夏期の声プロジェクト実験授業、各種イベントが目白押しでした。2007年度で任を全うした学術フロンティア「超表象デジタル研究」で蓄積された知見の数々はセンターの諸活動に投入されました。後継の特定研究を策定すべく、原案をもとにプロジェクトを結集し鋭意検討を開始しました。センター財政に関わるだけに喫緊の課題となっています。一般研究については、その在り方が研究室貸与の問題と併せて、検討の俎上に載りました。

学びの場プロジェクトでは図書館を舞台とした新機軸が試行されました。北米の大学図書館に見られる学習支援センターの機能を導入しようとするもので、日吉図書館との連携による「アカデミック・スキルズ」修了生の協力を得た学習支援です。日吉独立コア国際交流スペースの運用も学内3部門で検討してきましたが、名称も「第4校舎独立館」地下「日吉コミュニケーション・ラウンジ」と決まり、「日吉の家」の理想実現に向けた活用が待たれています。未来先導基金に採択された「三田の家」は、地元と密着した諸活動が評価されており、「芝の家」誕生への展開はその証左といえます。インター・キャンパスの成果は、着々と発信されています。

極東証券株式会社からの寄附金で、設置講座「生命の教養学」「アカデミック・スキルズ」「サイエンス・カフェ」を開講しましたが、殊に「アカデミック・スキルズ」の掉尾を飾る公開プレゼンテーション・コンペティションでは、履修者代表たちの成果発表を目の当たりにし、その確実な成長ぶりに感心しつつ、担当教員のこれまでの献身的な指導にも思いを馳せました。同社菊池社長には、未曾有といわれる世界的不況にもかかわらず財政支援を継続してくださり、感謝の念に堪えません。

センター活動の全容は本書をご高覧賜ることとして、ここでは私が垣間見た活動の一端しかご紹介できませんでしたが、とりわけ学生参加の多様な取組みには注目しています。これこそSPS（Student Personnel Services）の実践ではないでしょうか。学生運動が盛んであった往時の私ども学生部職員は、戦後、米国の教育使節団が大学にもたらしたSPSの理念は何かと真剣に議論したものでした。厚生補導とか学生助育とか称呼されるSPSは、要は学生を大学の真の構成員とさせるための働きかけ、と理解するならば、センターの活動は教養研究の領域にあるものの、根底にある理念は共通、との認識をもって、今後の業務遂行に相努めていく所存です。

慶應義塾大学教養研究センター
2008年度 活動報告書

2009年8月20日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　横山千晶

〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL.045-563-1111（代表）
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

編集・制作　慶應義塾大学出版会
印刷・製本　（株）太平印刷社

©2009 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。